

324-69

天尊 龜谷聖馨著

# 吾國體と宗教

加藤博士の所論を駁す

東京 名教社藏版

明治  
41 2 19  
東京

小 序

宇宙は絶対無限である、人類は有限で生物界の一  
微物である、宇宙は本體にして不可知である、生  
物界の一微物たる人類の知識を以て、不可知的宇  
宙の本體を窮むることは出来ない、若し之を推窮  
せんとすれば、即ち時間と空間と、自然法と因果法  
の支配を受けねばならぬ。彼の現象以外何物をも  
知ることは能はず、何人も科學的根據無くして或る  
ものを知り、又は信仰すること能はずと云ふ論者  
の如き、畢竟消極的立言に過ぎないので、其不可知  
的絶対無限なる宇宙の實在は、決して否定するこ

序

小

(一)

(二)

小

序

とが出来ない、これぞ宗教の成立する所以である、抑も宗教とは時間と空間と、自然法と因果法とを超越したる、無限絶對なる宇宙の不可知的存在を實感し、而して吾人が心の奥底に潜める靈的眞我と相交通感應する、人生必然的の要求である、然るに吾が學界の先覺者加藤博士は、時間と空間と、自然法と因果法に支配せらるる、實驗的科學に依りて知るもの、外は、皆迷信で所謂宗教なるものは、悉く迷信なりと斷言せられた、實に是れ由々しき大問題で、宗教には未だ曾て一指だも染められたことのない博士の言としては、其臆斷と不謹慎な

小

序

(三)

るを咎めねばならぬ、又其世道を害し人心を傷ふを攻めねばならぬ、此れ此書を著した所以である、吾人は科學の進歩發達を歓迎する點に於ては、敢て人後に墮ちない、されど科學の爲めに毫も宗教上の信仰を亂されない、のみならず科學の發達進歩するに従ひ、超然高踏益々神聖なる宗教心を向上せしむることに務めねばならぬ。

今上即位四十一年一月 孝明天皇祭日

東京にて

天尊 龜谷聖馨述

目次

第一章 叙論……………一

第二章 『信仰と知識』即ち『宗教と科學』を駁す……………八

第三章 『民族教と世界教』を駁す……………三五

第四章 『吾國體と佛教』を駁す……………五八

第五章 『吾國體と基督教』を駁す……………七〇

第六章 『科學的證明』を駁す……………八八

第七章 『眞善美を論じて倫理學上の迷見に及ぶ』  
を駁す……………九九

孔子曰。君子依乎中庸。遯世不見知。而不悔。唯聖者能之。

曾子曰。君子以仁爲尊。天下之爲富。何爲富。則仁爲富也。天下之爲貴。何爲貴。則仁爲貴也。

又曰。士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己任。不亦重乎。死而後已。不亦遠乎。

## 吾國體と宗教

龜谷聖馨著

### 第一章 叙論

宗教の問題は實に大問題にして、其起源に遡れば、種々なる社會的歴史的、即ち人文的事實を有すれども、これを概括すれば、畢竟吾々人類が精神の本體に關する問題で、他の語を以て謂へば、吾々人類に於ける靈的精神學である、人として苟も精神を有せざるもの無しとすれば、多少冷熱の差はありとしても、宗教心の無いものは一人もあらずと云つて宜からうと思ふ、世には往々吾は何れの宗教をも信ぜぬ、吾は無宗教者なりと誇言するものあれども、それは唯佛教と

か、耶蘇教とか、その他何々教を信仰せぬと云ふ迄であつて、如何なる哲學者、科學者と雖も、人心の奥底に潜んで居る、或る靈的實在物を否定することが出來ないのである、これが即ち一の宗教心に外ならぬのである。

序に云ふ如く、宗教心は吾々相對有限、不完全なる人類が、無限絶對、完全なる吾々の認識思想を超絶したる宇宙の實在に憧憬して、之と合一調和せんとする、必然的要求に應じて起れるものである、此の如く宗教は吾々人類に於ける最高絶大なる精神學であるから、百般の學術技藝は、皆其源をこゝに汲まなければならぬのである、然るに若し深奥なる宗教的信仰無く、科學萬能を謳歌し、物質主義を讚美して、自然法の外何物の存在をも認めざる、唯物的進化論者あらん

か、この人は一の學究の徒に過ぎないのである、予は常に云ふ、人として如何に百科の學術に造詣深くとも、一の高遠なる靈的宗教心を有せざる者は、恰も彼の皇帝の居まさるる宮殿の如く、如何に外觀の遂美莊麗を極むとも、毫も尊敬するに足らざると一つであるのだと、前にも云ふ如く、宗教は取りもなほさず吾々人類の精神學なれば、人苟も精神を有せざる者無しとすれば、其精神學たる純正なる宗教の信仰を侮蔑するは、これ即ち自己を侮蔑するものである。

科學の示す所に據れば、吾々人類が知識の進歩發達するに従ひ、自然の秩序と、原因結果の理法に因りては、現象世界の事實を研究し得るとは出來ると謂ふ、如何にも科學の力によりて、物質上の文明を進歩せしめたるとは、吾々と雖も

嘆美する所である、然れども、この廣大無邊なる宇宙萬象に向つて、人間の智力を以て究め盡くすことは出来ない、今日迄に<sup>科</sup>化學者の爲したる天文、地理、電氣、礦物、生物、其他あらゆる發見は、つまり宇宙の或る一部の變化を示したるに過ぎぬ、大宗教の根本から觀察すれば、此の廣大無邊なる宇宙の本體には、古今もなく東西も無いのである。畢竟時間と云ひ、空間と云ひ、或は原因結果と云ふも、吾々人類が勝手に名附けたるものにして、宇宙は常住不變である、この常住不變の存在を名けて、或は神とも云ひ、上帝とも云ひ、天の主宰とも云ひ、或はまた勢力とも云ふのである、耶蘇教では唯一眞神と稱し、佛教では眞如とも云ひ、或は法身(遍一切處)とも云ひ、婆羅門教の如きは梵天といふ、名は變れども其の宇宙の不

可知的としての實在は一つである、この實在が即ち宗教の聖座が安置せらるゝ大理石に外ならぬのであつて、取も直さず宗教は人生々活の目的に向つて、最高至聖の徳性を選択せんが爲めに、人の靈的心性に訴へるのである。

現今社會一般は最早物質的開化に満足せず、精神的文明の光を熱望しつゝありて、最早乾燥なる哲學や、凡俗なる科學の研究により、到底今日一般の人心を慰藉する事が出来無い、茲に於てか必然的要求として、宗教を追及するの理想は澎湃として溢れ來り、また停止する所を知ることが出来ない、これが爲めに純正善美なる宗教を選択するに違あらず、無雜作にも不眞理なる宗教を渴望するものあれば、或は奇怪なる教理を迷信するものありて、遂には一種の病的精神

家となり、健全なる思想を喪失するもの、多く出づるのは、最も嘆かほしい事である。こゝをもつて、吾々は常に純正善美なる宗教を選択して、吾れ人共に此の宗教の眞理の靈光に浴せなければならぬ、純正善美なる宗教と言ふは、予の常に信仰し且つ研究しつゝある佛教中に於ける、華嚴聖典の眞理を云ふ、それは後段に至つて述べんとす、加藤博士は吾が所謂凡俗なる科學者にして、廣大無邊なる宇宙間に、自然法と原因結果の理に據るの外、何ものをも信じ無いといふ、科學萬能一點張の人であることは世人の皆知る所である、昨年九月であつたと思ふ、予は四國に巡廻中、或る友人から一書籍を寄せ來つた、繙いて見れば加藤博士の著にして『吾國體と基督教』と云ふのである、これを一讀せしにその所論

淺薄で、殆ど攻撃を試むるの價值も無いと思ふたが、加藤博士は前帝國大學總長であつて、學界の泰斗として特に人爵も高く、斯人の云ふ所は世間一般に傳稱せられ、中には博士の説を信ずる者もあらうと思ひ、冷然雲煙過眼視する譯にもゆかず、其後閑を得ばこれが駁論を書いて見ようと思つて居つた、されど昨年十二月迄は、四國及東海道を巡遊して居たために、閑を得なかつたからその儘となり居たが、今年となるや、小閑を偷みて此の駁論を試みたのである、然れども、博士は大學者ではあるが、實は形而下の唯物論者である、予は菲才淺學者なれども、精神的形而上の宗教を信ずる唯心論者である、故に宗教的高き理想の鏡に、低くき唯物論者の影を寫すには、何となく物足らぬ心地せらるれば、乃ち



高き理想を數段引下げて、極めて卑近に攻撃を試んとするのである。併しながら博士は學位と爵位を有する、人爵高き貴顯の人である、予は學位もなければ爵位も無き、在野の老書生であるのに、斯かる先覺者に對して攻撃の矢を向くるは、實に敬虔の意を失するの責めは免がれざれども、道の爲め眞理の爲めには、黙すべからざるものがある、博士乞ふその不遜を咎めたまはざるを。

## 第二章 『信仰と知識即ち宗教と』

### 科學』を駁す

純正善美の宗教として世に立つ所の佛教の如きは(耶蘇教も主宰者を立つ)一切の萬物は宇宙の眞理大原より生出

するものと説き、總て人間の靈的知識を根本原理とする者である、故に哲學なり科學なり、其他百般の學術は皆此根本原理より發生するのであつて、その大原眞理を或は上帝とも云ひ、唯一眞神とも云ひ、或は天の主宰とも云ひ、而して宇宙の大原眞理と、吾々人類の心性とが、相交通感通するそれに向つて信仰を立つるのであつて、決して迷信的のもので無い、この信仰は即ち知識に外ならぬのである、この道理に因れば、科學も或は信仰的知識の一附屬物たるに過ぎ無いと云つてもよからう、古今東西の各哲學者も、ソガ宇宙の實在と神の存在を認めないものは、殆ど無いではないか、或は印度の九十五種のブラマ教でも、或は希臘の賢人等の哲學でも、大抵宇宙の間に於ける不可知的存在を認めないもの

はない、耶蘇教の如き今日猶諸種の學術の上に超出して、世界各國の帝王を始め、文明國人一般の信仰を繋ぎつゝあるものは、畢竟其教理の中に智的哲學的高尙深遠なる眞理を有するからである、佛教に至つても、其教理の幽玄高妙にして、而かも一大哲理を含有して居ることは言を待たず、彼の眞言や天台の所談は、高遠なる哲理を含み、特に華嚴家所談の、十玄六相の理や、重々事々無礙論の如きは、最も幽玄を極め、實に驚歎すべき大哲理の談にして、今日一般學者の注目する所となりしのみならず、西洋の哲學者間にも、大にその教理の深奥なるを歎美し、之れが研究に指を染むる者出來りしと聞く、吾々は斯の如き知識の上に立てられたる、眞宗教の信仰でなければ、恰も空中に樓閣を築くものと一様で

あると思ふ、然るに加藤博士は知即信の眞宗教に暗く、自然進化の道理に據らざる外は、宗教は總て迷信のものと臆斷せらるゝは、實に嘆はしい次第である、博士はその著書の第二章の劈頭に掲げて曰く、

余は基督教を以て、吾が國體に大害あるものと考へて居るから、その理由を科學的に證明してみやうと思ふのであるが、然し余は獨り基督教に限らず、凡そ宗教と云へば宗派の如何を問はず、全く好まぬのである、そは何故歟と云ふに、如何なる宗教といへども、悉く吾人に迷信を與へるもので、大に知識進歩の妨害をなすからである、(中畧)余輩殊に知識の進歩を希望するものに在ては、到底如何なる宗教をも取ることは出來ぬのである、(中略)凡そ宇宙間には吾々人間の智識に於て解することの出來ない現象が澤山あるには相違ない、けれどもそれを以て直に神秘だの、奇怪だの、超自然的現象だのと、思ふのが大なる間違である。

從來吾々人間の知識の進歩に依て、従前殆ど解釋の出来なかつた現象か、追々解釋されたことは澤山ある。今日の自然科学は、現に簡様な解釋をなしつゝあるではない乎。前世紀の後半以來、自然科学は驚くべき長足の進歩をなして居るのであるから、此以後に於ける智識の開發は、如何なる程度に迄達するものである乎、決して豫知は出来ぬと思ふ。

博士は既にその議論の根本を間違つて居ると思ふ。前にも云ふ如く、宗教はその目的とする所は、内的省察に依りて宇宙と人生に關する最大最終の疑義を闡明推究して、吾々人類に究竟的安心立命を與へんとするものであつて、彼の科學の目的とする物質の探究と、その旨を異にして居るのである。然るに博士は科學的にたゞ物理を研究し、其原因に依りて結果を究むるの外は、總て迷信であると云ふのは、それこそ實に科學的迷信者と云はなければならぬ。殊に又博

士は、釋迦は母の胎内より出づるや否や、直ちに天上天下唯我獨尊と唱へたと云ふことや、耶蘇の母が聖靈に感じて基督を孕んだと云ふことや、基督が十字架にかゝつて殺された後に、復活昇天したとかいふことや、常識で解すべからざる奇蹟の多きことやを列舉して、迷信呼ばはりをせらるゝが、これは何の論證にもならぬ事であると思ふ。その理由は、古より英雄豪傑に就いては、種々の奇蹟や不可思議なる附屬物を以て、その人々を仰讚したのは珍らしくもないとて、これ等は畢竟その偉人英雄を尊崇する餘り、爲めに誇大にした事で、釋迦や耶蘇やの如き聖者に對しては、或は神話的に或は詩的に之を仰讚して、ソガ所説の宗教の眞理を信ぜしめんがための、所謂手段方便である。然るに博士は、眞の宗

教の眞理はどんな物やら分らずして、唯宗教の手段方便を列擧して、迷信呼ばはりをするのは、實に科學者に似合はぬ、大人氣ない態度であると言はねばならぬ、今日社會一般の事にしても、政治上或は國際上の儀式典禮に就ては、隨分兒戲に等しい事は間々ある事である、又博士は「聖母マリアが聖靈に感じたなどといふのは眞赤な虚言で、全くは許嫁ヨセフなるものゝ目を竊んで、アンドラと歟アンデラとか名乗る希臘民族の墮落生と、私通して基督を孕んだのである」と云ふに至つては、實に吾が學海の泰斗と稱せらるゝ一個の紳士としての語調とは思はれぬ、孔子も君子は人の美を成す、人の惡を成さずと云つたが、加藤博士も一個の學者とし、君子人としては斯かる口調は慎まれたしと思ふ、よし

又假令耶蘇は墮落生と私通して孕んだものにせよ、今日世界の聖者として帝王貴人や、一般文明國人の尊敬を受くる點に於ては、こんな事は些しも耶蘇の人格を傷けるに足らないので、畢竟博士の云ふが如く、墮落生の私生兒とすれば、却つて耶蘇の偉大なる光を増さしむるのである。

博士の所謂自然科學が、長足の進歩をなして、現象界の解釋をなした事は澤山有るけれども、それは唯廣大無邊なる宇宙の間に起滅する、森羅萬象中の一部に解釋をなしたるものに過ぎずして、つまり滄海の一粟、九牛の一毛だにも價し無いのである、然るに博士は、その宇宙の間に起滅する生物界の二微分子たる人間の智識を以て、この廣大無邊なる宇宙の萬象を解釋する事が出來ると思惟せらるゝのは大な

る間違である、博士よりは文章や詩が上手かも知らぬが、否  
 確かに上手であるが、博士より科学的智識が少なかった、彼  
 の宋の蘇東坡でも、ツツト昔にこんなことを言つて居る、  
 客亦知夫水與月乎、逝者如斯、而未嘗往也、盈虛者如  
 彼、而卒莫消長也、蓋將自其變者而觀之、則天地曾不  
 能以一瞬、自其不變者而觀之、物與我皆無盡也。  
 と、實に此文は、宇宙萬有の悠久と起滅とを道破して、また餘  
 蘊なしと云つてよからう、又彼は廬山を賦する詩に曰く、  
 橫看成嶺側成峰、遠近高低總不同、不識廬山真面目、  
 祇緣身在此山中、

と實に彼れが作りし詩文は、何れも一種の哲理を含て居る  
 が、殊に此一絶詩は宇宙間に栖息して、宇宙の真相を解釋せ

んとする、古今東西の哲學者や、科學者の頂門の一針である  
 と思ふ、由來吾々人類は此廣大無邊なる宇宙の間に栖息す  
 る一生物でありながら、僅かに五十年か七十年の短日月間  
 で研究した知識を以て、原因結果の理に依れる實驗的の者  
 でなければ信ずる事が出来ぬなどと云ふは、實に大膽であ  
 る妄斷である、吾々人類が宇宙の間に栖で宇宙の全體を究  
 明せんとするのは、矢張り廬山に在つて廬山を看る如く、看  
 様でドンナ形にも成る、宇宙の真相は矢張り宇宙の主宰者  
 でなければ知る事は出来ぬ、況や博士の如き自ら自然科学  
 の羈絆に縛せられて、原因結果の範疇に跼蹐する人では、到  
 底判りさうな事はないのである、併し乍ら博士も又自ら知  
 るの明があるのであるか、斯う云ふ事を云ふて居られる。

尤も吾々の知識が如何に進歩しても到底遂に解釋の出來ぬことも必ずあるであらう吾々の知識進歩には限度があるものとすれば決して其上には出ることとは出來ぬであらう。

是あるかなだ、博士も矢張り人智の發達は豫知する事の出來ぬことを豫知して居ると同時に、吾々の知識が如何に進歩しても、到底終に解釋の出來ぬことも必ずあらうと云ふことは、自覺して居るのである、之れが即ち宗教上に於ける大問題で、宗教の成立する所以であつて、これが外界の物質と、吾々の精神内容とに關する、一種の神秘の力とも云ひ、或は時間空間と、原因結果の理法に超絶したる超自然とも云ひ、神とも上帝とも云ふので、斯く呼ぶに何の差支もないのである、然るに博士は、宇宙間には解釋の出來ぬ事のある

ことを承知しながら「これを以て宇宙には神秘がある、超自然の事があるなどといふ事は出來ぬ、唯吾々の知識の及ばぬまでのこと、認めねばならぬ」と云ふは、實に譯の分らぬ事と思ふ。

それから博士は歐米では中古基督教の勢力が非常に盛であつた爲め、今日に及んでも哲學者科學者の如き知識のまさつたものでさへ、殆ど遺傳を脱する事が出來ない有様である如く云はるゝが、前にも云ふ如く、耶蘇教は矢張り歐米文明國に於て、百科の學術の上に超出して社會一般の信仰を繋ぎつゝあるのである、殊に又博士は佛教に對しても昔は勢力が盛であつたが、徳川幕府の世となり儒教が勢力を得てから、中流以上の社會は専ら儒教で支配せられ、今日

は中流以下のものが迷信して居るやうに云ふけれども、之は大なる間違である、成程博士の云ふが如く、佛教全體の中には、随分迷信を勸むることも有り、或は教團或は教權は非常に衰へてあるけれども、佛教の眞理といふものは、決して今も衰へて居らぬのである、博士のいふが如く、百般の學問が進歩して、科學が益々發揮せらるゝに随つて、佛教の教理は益々光輝を發し、早晚何れもこの廣遠なる佛教の教理に歸入するのであらうと思ふ、孔子曰く『齊一變則至魯、魯一變則至道』と、予思ふ科學一變せば哲學に至り、哲學一變せば宗教(精神學)に至らんと、又博士は

宗教家は動もすれば愚説を吐いて、信仰は知識を超越するものである、信仰は決して知識から得らるゝものでない、信仰は知識をからずして

得らるゝ道があるなどと主張するのであるが、これが實に分らぬことであると思ふ、未だ嘗て知らぬ事を信すると云ふことは、如何に考へても出来ることで無い、尤も其知ると云ふことに精粗の相違は有らう、なれども併し全く知ると云ふ手段がなくして、之を信すると云ふことは到底出来ることでない、左様な信と云ふものは、全く輕信、妄信、盲信といふやうな信であつて、一語に言へば之れが迷信である、先づ知つたことを始めて信するから、それで正信と云ふものになるのである、それ故正信と迷信との相違は先づ知ると、まだ知らぬとの相違から生ずるのである

と云はるゝが、決して眞正の宗教家は純清なる信仰は知識から得られる者でないとは云はない、勿論佛教中には人の精神上に就て二つの行路を立て、其大路を難行道と云ひその小路を易行道と稱へ、大路には五位百法の路次を示して

居る、その大路と云ふは自分の知識に因て進み、その小路とは知識の足らざる者が、知識の勝つた者の力に依て、その大原に歸着すると立て、有るのであつて、決してその自力と云ふも他力といふも、知識的信仰を外にして、真理の大原故郷に到着することは出来ないのである(博士に斷つて置く、この大小二路は、科學の研究では無い、人の内的省察に於ける知識的信仰である)然るに宗教の事は御存じなくして、頭から輕信、妄信と云はるゝ博士は、原因結果の理や、自然法を輕信、妄信、妄信して居らるゝからである、博士は因果の理法を主張せらるれど、原因とか結果とかは、宇宙萬有の起滅に對し、差別的に判斷を下したるものに外ならず、佛教中の華嚴哲學には、五周の因果の理を説いてあるが、實に高尚幽玄

にして、博士の所謂原因結果は、差別的に屬する一番卑近なものである、これ等の深理は説明したとて、天台とか華嚴とか云ふ、高尚深遠なる教相學を研究し無い博士には、分るまいから止すとしよう。また博士は高等動物になると、信と云ふことのあるのは明に分るとて、牛馬、犬羊がその飼主を信ずるの一例を引いて云々せられるが、牛馬、犬羊は牛馬、犬羊其のもので無ければ分りそうな事はない、然るに牛馬、犬羊は其飼主を信ずると云ふ如き、淺薄なる論證を引來るのは、<sup>抱</sup>捧腹絶倒の至りであつて、殆んど論難する價值はないのであるが、博士は「他動物は飼主の平生の如何を知るから、それで初めてそれを信ずるやうになるので、他動物には正信があつて迷信が無く、却つて吾々人間のみに迷信が在ると云



はるゝのは、甚だ奇怪に思はれるけれども、之は人間が他動物よりも想像力が強いからであると思ふ、動物は知識の乏しい爲想像力も乏しいが、人間は知識が進歩して來たから、又却つて想像力も強くなつた、それゆゑ想像に誤まられて、遂に信ずべからざる事を信ずるやうになつたのである」と、成程科學萬能主義を主張し、却て科學に支配せられ、無限なる絶對者が科學を支配するを自覺し得ぬ人の議論だけあつて、人類を引下げて他動物の下位に置かんとして居る、博士知ずや人類の尊貴なる所以は、他の動物に勝れたる想像力を有するからであつて、科學及び總ての學術の進歩發達を來すのは、畢竟想像力が強いからであるのを、萬が一にも吾々人間に想像力が無いとしたならば、學術の進歩も、世の

文明も斷じて見ることは出來ない、然るに博士は人間の想像力が知識の妨をする抔と云はるゝのは奇怪千萬である、畢竟想像力とは知識の働きである、余は今自説を以て博士の議論を攻撃するを止め、茲に故中村敬宇先生が、曾て哲學會雜誌第十六號に掲げたる『想像の樂』と云ふ、講演の一節を掲載して、博士の人間の想像は知識の妨を爲すと云ふ説に留めを刺して置く、乃ち敬宇先生が講演の一節に曰く、

想像の樂みに付て第一に考ふべきことは、外物を眞實に見た所のもので、何が能く樂みになるかと云ふに三つの樂みとなるものがある、第一に廣大なるもの、第二は新奇なるもの、第三は美麗なるものと云ふ、此の三つの外は無い、(中略)廣大、新奇、美麗と云ふものは、想像の樂みを作るものだと云ふに就いては、此の樂みの因て出る所の原因は、何處に在るか

い造化の工、技藝の巧と云ふものは、何れも人の想像を喜ばしむるが、さ  
て較べて見ると、人工の方は天工に比すれば甚だ不充分のもの、やう  
に見え、實に廣大無邊だと云ふやうなものは無い、天工だとまことに大  
きく巧みであつて、奇麗に見ゆるけれども、人工ではさう云ふことは決  
して出来ない、然れども天工の大いなるもの、中に人工を加へて技藝  
を以て飾るときには、天工が益々現はれることになる、其れ故に人工を、  
大層立派に、庭を拵へるとか、家を拵へるとかするに、其所の地面が狭い  
ときは、人工ではひろげやうがない、故によい庭園を造るには、廣大に見  
へるやうにしなければ、いくら家ばかり立派でもつまらない、そこで誰  
でも天然自然の善い景色の所を見たと、人工の庭園を造り、さうして  
宜い家でも建つると云ふ順序になる、それゆゑに人工と天工とまざら  
なければ、十分に可喜ことはならない、此道理によつて、詩人は常に田野  
に棲んで居ることを好む、其れは城や町に住んで居ては天造の妙を見  
ると云ふことが出来ず、従つて想像の樂みを充分に受けることが出来る

からだ(中略)想像から出て文章を作り、或は戯作を拵へるのも面白いが  
さてまた新しい理學者が、段々新しいことを穿鑿をして、眞の理を發明し、  
天地間の物、悉く上帝の造られたもので、其の深奥なる物理を窮め、一世  
を利益することはいはゆる心悟の樂みで、其の樂みはまた大層なこと  
だ、この眞理を發明する心悟の樂みは、今日の題に於て言ふことでは無  
いが、ちよつと其の端緒を今少し言つて置きたいと思ふ、先づ光學が段  
々と進んで來て精巧なる顯微鏡を拵へだし、其れで樹の葉一枚を見る  
と、其の上に蟲が居る、其蟲は裸の目には見えないが、顯微鏡だと、凡そ百  
萬も群つて、簇々して居るといふやうに見ゑて、大層に面白い、即ち事物  
の理を、我が心の道理で考へて、面白いと思ふもので、これは金石の學で  
も、氣象の學でも、並に草木の學、礦山の學でも、すべて眞理を發見する  
ときは、樂しいものだ、今ま一つ天文学で考へて見ると、地球の外には惑星  
があり、また其の上に、恒星がある、恒星といふものは、外の光つたもので、  
即ち我が日輪と同じことで、その恒星のぐるりには、又惑星があつて、之

と云ふことを考へなければならぬ、勿論我々が我が心で思ふ意思の性質だの、人の精神だのと云ふものは、どふいふものだから、はつきりと知れ難いことだけれども、先づ人の精神の此の如き作用があつて、想像の樂みを受くることの出来ること云ふのは、段々に本を推して見ると、始めて之を作られた創始者の仁善と智慧とを感嘆せずには居られない、そこで凡てのものに於て、人の樂みの中で此の根元を知ると云ふことが、誠に大層肝腎なことだ、我々人類の上にある造物主と云ふものは、人の精神を斯くの如く拵へて、幸福を受くることの出来るやうにされたのは、最も驚くべきだ、なせなれば、人の幸福と云ふものゝ大なる部分は、造物主のことに觀察することから起つて來なければならぬ、而して實に造物主が人を造るに、大いにして且つ限りの無い所のものを、領會して樂しましむると云ふことに考へなければならぬ、これに依て人は上帝の性を觀察し、時に就いても限りない、場所に就いても限りない、其の上帝の大いなること、廣大無邊なることよりして、其れを觀察するから、

人の心の樂みと云ふことは最も大なることで、また上帝が何でも非常とか新奇とか云ふことを好むと云ふ心を人に與ふると云ふことは、神の造つたものゝ中で、尤とも驚く可きことである、なせなら、これが無ければ、人が段々に研究して、學問に進み、次第に眞理を發明することには決してならない、故に新奇の考へと云ふものは、最初苦しみをすれば、後に樂みがあると、その樂みが苦しみの恩賞である、この恩賞が、最初の苦を償ふに足ることである、拵その新奇を好むと云ふ人の心よりして、世の中には新しい發明が出來て、段々世の中の幸福を増すと云ふことも、畢竟人に奇を好むの性があるに由ることだ、其れから前にも言つたが、上帝は、人に美麗を愛すると云ふことを與へたのも、これで世間が立派になり、文明に進むのである、これがなければ、いつまでも野蠻の姿であつたにちがいない、またこれがあるので、人が自分の配偶の美麗なるを愛すると云ふことで、世の中が限りなく續き、世界に人口が出来るのだ、が、若し美を愛すると云ふことが無ければ、地球に人民が減るに違ひな

い造化の工、技藝の巧と云ふものは、何れも人の想像を喜ばしむるがさ  
て較べて見ると、人工の方は天工に比すれば甚だ不充分のもの、やう  
に見え、實に廣大無邊だと云ふやうなものは無い、天工だとまことに大  
きく巧みであつて、奇麗に見ゆるけれども、人工ではさう云ふことは決  
して出来ない、然れども天工の大きいなるもの、中に人工を加へて技藝  
を以て飾るときには、天工が益々現はれることになる、其れ故に人工を、  
大層立派に庭を拵へるとか、家を拵へるとかするに、其所の地面が狭い  
ときは、人工ではひろげやうがない、故によい庭園を造るには、廣大に見  
へるやうにしなければ、いくら家ばかり立派でもつまらない、そこで誰  
でも天然自然の善い景色の所を見たとて、人工の庭園を造り、さうして  
宜い家でも建つると云ふ順序になる、それゆゑに人工と天工とまざら  
なければ、十分に可喜ことはならない、此道理によつて、詩人は常に田野  
に棲んで居ることを好む、其れは城や町に住んで居ては天造の妙を見  
ると云ふことが出来ず、従つて想像の樂みを充分に受けると出来る

からだ(中略)想像から出て文章を作り、或は戯作を拵へるのも面白いが  
さてまた新しい理學者が、段々新しいことを穿鑿をして、眞の理を發明し、  
天地間の物、悉く上帝の造られたもので、其の深奥なる物理を窮め、一世  
を利益することはいはゆる心悟の樂みで、其の樂みはまた大層なこと  
だ、この眞理を發明する心悟の樂みは、今日の題に於て言ふことでは無  
いが、ちよつと其の端緒を今少し言つて置きたいと思ふ、先づ光學が段  
々と進んで來て精巧なる顯微鏡を拵へだし、其れで樹の葉一枚を見る  
と、其の上に蟲が居る、其蟲は裸の目には見えないが、顯微鏡だと、凡そ百  
萬も群つて、簇々して居るといふやうに見えて、大層に面白い、即ち事物  
の理を、我が心の道理で考へて、面白いと思ふもので、これは金石の學で  
も、氣象の學でも、並に草木の學、礦山の學でも、すべて眞理を發見する  
ときは、楽しいものだ、今ま一つ天文學で考へて見ると、地球の外には惑星  
があり、また其の上に、恒星がある、恒星といふものは、外の光つたもので、  
即ち我が日輪と同じことで、その恒星のぐるりには、又惑星があつて、之

て居るだけのものは、大底具へて居らなければならぬ、そして見ると、この極小さい目に見へない蟲の住でいる地球もあり、行星プラネットもあり、太陽もあれども、皆小さくて人の目にはみえない、みんな微塵より百倍小の中に、それ丈けの者が含んである、大きい所も限がないが、小さい部分に至つても亦どの位さきのさきがあるか分らない、ちよつと話を聞くと、戯談ヒョウタンのやうに思ふだらうが、大小の比較を取つて推測して知る、あなろじいと云ふもので間違のないことだ、造化の不思議實に驚くべきことである、抑も此の想像の話をすると云ふものは、人は想像に依て、福も造れは禍も造り、禍の中に居ても、想像に由つて樂みを受くることも出来る、また世の中には、外面の福を極めて居ても、想像で禍を作り出して居るものがある、これは大いなる間違である、併し想像は善く用ひなければならぬ、悪く用ふると、不仕合せが此の上も無い、想像は善く之をおさむると、鏡の中に好景色を寫して樂むやうなもので、悪く之を受くと、鏡の中へ鬼を入れて、自ら苦しむと云ふやうなものだ、また想像と

を廻つて居ると云ふことだが、もう目の力チカラでは見えない、更に銀河アキラガハなどに至つては、極の遠き恒星で、其間にやはり惑星があつて、廻つて居るに違ひ無い、さうして見ると、其れは目に見ゆるだけは、先づ見ゆるが見えない所は、砂微塵の如くで、地の上の砂よりも星の數の方が多に違ひない、そこに至つては、もう學問の力では、假令算術上でも届かない、そこは想像と比較と云ふもので、蓋し此の通り限りないだらうと云ふことが、想像力と學問と合した上で無ければ知れない、そこで之を造る所の創造者あることを知るも、想像力に依らなければ、知るには至らない、そこでまた大きい方はさうで、人の身體は、世界に較べては、大層小さいけれども、又小さい方をいふと、微塵より百倍も小さい蟲がある、其の小さな蟲から比べて見れば、人間の體は大層大きなものといつて宜しい、何の事はない、天體と人體との比較ぐらゐなものだ、其の極小さい目に見えない蟲にも、魂ソウルもあれば、また手足も有つて居る、其の間に血管もあれば、流れて居る血もある、其れだけの小さな所に、皆な大きいものに有つ

云ふものを、無茶苦茶にすると、金盃に水を入れて、其れを日のあたる所に出して、さうして其の中を引つかき廻して見ると、その光りが障子だの、壁だのにきらきら動いて、東にぶつつかつたり、西にぶつつかつたり、妙ちきりんなものになる、其れは想像を治めず、亂れほうだいになると、そんなものになると云ふ誓諭である。

そこで最も我々が自ら驚くことがある、一日晝の間は外へ出て、銘々その職分を勤め、さて夕べに歸つて、それから少しの間だから、もう自分だけの樂みを極めて居らるゝもので、浮世の事を忘れて、晝間の骨折りをしたことを忘れて、銘々好みに従ふとも心を安んじて清閑にして宜しい、然るに閑な所へ晝間のことを持ち込んで来て、自分の心を其れが爲めに紊すと云ふやうなことがある、身體は安坐して心は誠に忙がしい、こんなことは大ひなる間違ひだけれども、兎角さういふことになるものである、こういふ時には、想像の樂をみつめて、或はたゞ心の中に或は讀書看畫とかして、樂しむが宜しい、昔の勇將などは、千軍萬馬の中に

在つても、泰然として心を動かさず、戰場に奔走しながら、其の心は猶ほ一室に閑居して居るに同じやうであつたと云ふことだ、然るに閑を樂んで宜い時間に、過去や未來のことを思ひつゞけ、心配なる困しき想像するはつまらないことだが、こういふ私もやつたことがある、また或はこれがこうじてくると、悪い想像によつて自分で病を拵へることも有つたと、禪家にては、流注想といひ、英語にては、アッソシエーションといふて、これから病を造る人の世の中にいくらもあるに違ひない、想像は樂みを爲し、また困しみを爲すもので、天堂も地獄も、皆な我に在つて之を造るものだ、と云ふことが出来る、外で無い、我れ自心と云ふものが何よりも肝腎なことだ、この演説は、アヂソン氏の文に本づきて、吾説を雜へたるものなり。

博士が人間が想像力が強くて、想像に誤まられ、終に信すべからざる事を信するやうになつたのであると云ふ論據

は、敬宇先生の説を以て、最後の留めを刺して置たが、猶博士はこの章に於て、宇宙真理の實在物を、假に人格的に神や佛と云ふ事をばお化けである、幽霊であるといはれるが、この論旨は吾々は人類であることを滅却して立てた議論で、宗教上學術上論難するの價值もないものとして置くが、博士は本章の末段に至りて曰く、

斯く宗教を惡く云ふもの、又其善い方面も全くないとは言へぬ、それは重に如何なる方面である乎と言へば、就中、宗教が古來社會に貢献した慈善事業である、殊に基督教にあつては、慈善事業は種々あつて、頗る効績が多い、是れは今更説明するの必要もない程に明瞭な事である、其中にも近來救世軍の仕事は、最も感服の事であると思ふ、又吾が邦の佛教でも、古代に於ては種々の慈善事業があつた、近來も少しはある、併しそれは決して基督教の眞似ばかりではない、古代の事業を復興した

のであると言つてもよいが、近來は決して十分な事ではない、又佛教は古代に於ては慈善事業の外に、經濟事業にも随分骨を折つたのであるから、兎に角佛教が古代社會の開明に貢献した所が、決して少ないとは言はれぬ。

前にも云ふ如く、博士は宗教に指を染められた事は無いので、宗教が精神上、又は思想界に施した所の、偉大の効驗は少しも云はずして、たゞ宗教家が宗教の眞理を多くの人に信ぜしめん爲めの方便として、爲しつゝ、ある慈善事業などの副業を讚美して居るは、實に笑止千萬の事である。

### 第三章 『民族教と世界教』を駁す

前にも云ふ如く、凡そ宗教なるものは人類の靈的精神が、その有限の生命と智力以外に、この宇宙の間に萬物を支配

する、偉大なる聖靈の存在しあることを憧憬し、これと相感  
應交通せんとする、人心秘奥の必然的要求である、乃ち社會  
人文的顯現で、人文史上人類精神の産物として表はれたも  
のであるから、その原始時代に遡れば、その時代に於ける民  
族教なるものも、普遍的世界教の實質を具へてないものは  
無い、是等は太古希臘の宗教史や、印度娑羅門教等の宗教史  
を繙けば分ることである、然るに加藤博士はその著第二章  
に於て、世界教の形を具ふる佛教の所謂阿彌陀とか、耶蘇教  
の所謂神とか、全世界人類を支配する神若しくは佛とい  
へど、民族教には一國々有の神を置いて、全く世界的の宗教  
たる資格を備へて居らないやうに説いて居るが、その所謂  
民族教でも決して博士のいふが如く、狹隘なる神の性質を

説くばかりではない、此他教權と政權との區別を説くとは、  
普通學者の一般知る所なれば、茲にくだしく論難を試  
るの必要は無い、こゝに博士が唯一の武器とする博士の著  
述『道德法律進化の理』に説いた所の、世界教が唯世界を視て  
國家を見ない所から、國家の爲めに不利となる道理に就い  
て、佛教及び耶蘇教に對し、論じたる所を論難せんければな  
らぬ、即ち博士の説に曰く、

世界教たる佛基兩教は、古代未開の國民教の如く、特に國神を奉じて其  
國の爲めに教を布くものにあらずして、或は全世界衆生の爲めに慈悲  
を垂るゝ所の佛を奉じ、或は全世界萬物の創造主たる唯一神を奉じて、  
世界全人類の爲めに教を布くものなれば、既に全く國家的性質を脱し  
て、實に世界的性質を帯ぶるものたるを敢て辯を俟たず。



果して然らば、此兩教の教徒たる者、教徒とは教化を掌る者にして、佛の僧徒、基督教の傳道士を指す、而して教化を受くる所の一般凡俗は之を信徒と稱すが、各國主權の下にありて、其臣民となるが如きは、甚だ世界教の本旨に反れるものにあらずや、世界教の教徒が各國主權の下に服して、其制馭を仰ぐに至ては、世界萬國、世界全人類に對して、既に内外親疎の別なき能はざれば、隨て世界萬國、世界全人類の爲めに、不偏不黨の態度を取て、以て佛若くは神の一視同仁の本旨を貫く能はざるは、固より當然の結果と言はざるべからず。

佛は吾人に他人に對して、只管慈悲忍辱を用ひんことを教へ、基督は吾人に敵を愛せよ、他人若し吾が一頬を打ち來らば、更に他頬をも之に向けよと教ふるにあらずや、然るに兩教の教徒は、果して能く此教旨を守り得るや否、假令教徒、自己自身は能く此教旨を守らんと欲するも、苟も一國の臣民に屬する以上は、敵國に對しても、尙自國の臣民に對すると同一様に、能く此教旨を守り得ざる場合の生ずるは、實に已を得ざるに

あらずや、國家が教徒に徴兵義務を命ずるときは、之に應じて立て兵器を執らざるべからざるは、言ふ迄もなきのみならず、若しも自國の敵國に對する行爲が、假令甚だ暴戻無道なる場合にも、此暴戻無道なる行爲を援けて、以て正義なる敵國を倒すに、努めざるべからざるにあらずや、是れ果して慈悲忍辱主義若くは使打頬主義を絶對的責務とすべき教徒の所爲と云ふべき乎、加之、基督教徒は戦争に際し、必<sup>ニ</sup>自國の勝利敵國の敗亡を神に祈禱するにあらずや、日清戦争の時、佛教徒は、吾が邦の勝利清國の敗亡を佛に祈願せしにあらずや、是れ果して世界萬國、世界全人類に對して一視同仁なる佛又は神の意を遵奉するの行爲とすべき乎、若し此の如き行爲をして、國民教の教徒に出でしむれば、余は其甚だ理あるを稱せんと欲すと雖、世界教の教徒にして此の如き行爲あるに至ては、其教旨に對し不忠不義の最も大なるものとせざるを得ざるなり、但し以上は尙已むを得ざるの情狀なきにあらずや、を以て稍恕すべしと雖、更に之より甚だしきものあるを如何せん、古代のゼズイト

教派は言ふ迄もなく今日の教會と雖、尙政府の爪牙となりて外教國の侵奪、外教人民の壓倒を幫助し、以て自ら揚々得色あるが如きと往往なしとせず、殊に近日清國に於ける傳道士の行爲の如き、大に怪訝すべきものあるにあらずや、是等は彼等が如何に辭柄を設けて辯護せんとするも、到底寛恕し得べきにあらざるなり。

斯くは論ずと雖、右等の行爲を以て強ち彼等教徒の罪とすべからざる理由も亦なきにあらず、其實は彼等教徒が二種の相矛盾せる資格を一身に兼有するが爲めに、遂に此の如き背教的行爲の已むべからざるに至れるなり、彼等教徒は特に世界教の教徒たる資格を有するのみならず、更に某一國の臣民たる資格をも有す、而して此二種の資格は往々相矛盾せる責務を生ぜざるを得ざるに至る、是れ即ち彼等教徒の行爲が、其教旨に悖戻せざるを得ざる所以なりとす。

凡そ國家臣民たる者は、一意専心國家に忠ならざるべからず、義ならざるべからず、換言すれば國家臣民たる者は、絶對的に國家の安寧幸福

の爲めに勞せざる可らず、盡さざる可らず、若し然らざれば、國家は遂に其生存を維持し、其隆盛を増進するに能はざればなり、而して國家は其臣民に對して、毫も除外例を許す能はざるが故に、教徒にも凡俗と同く此忠義を負はしめざるべからず、若し教徒にして此忠義を缺かん歟、是れ不忠不義の臣民にして、道德は之を貶し、法律は之を罰す、假令又國家が之を強ひざるも、生れながらにして國家臣民たる者は、其身世界教の教徒たるにも拘はらず、自然に此臣民的忠義心なき能はざるは當然のことなりとす。

果して然らば、佛基兩教の如き世界教の教徒にして、世界萬國全人類に對して一視同仁なる教旨を奉すべき者が、更に一國の臣民となりて、特に其國の爲めに忠義を盡さんとするは、即ち相矛盾せる二種の責務を一身に兼有するものに外ならざれば、彼等が常に此二種の責務を全くせんとは、到底なし、能ふべき筈のものにあらず、印度及び猶太の人民は、本來國家的思想に乏き人民なれば、釋迦及び基督の教旨が、殆ど國家

的性質を有せざるは固より其所と云ふべし、釋迦基督は毫も國家の爲めに盡したるとあらず、國家の盛衰興亡は如何もあれ、并は釋迦基督の敢て憂慮する所にあらざりしなり、釋迦基督の理想は全く個人の靈魂の救済にありて、毫も國家の進歩發達にはあらざりしなり、蓋し慈悲忍辱主義と使打類主義とは、到底國家の進歩發達に不利を生ずるものとせざるを得ざるなり。

前述の如くなれば、國家的思想と世界教たる佛基兩教の主義とは、殆ど全く氷炭相容れざるものと云はざるべからず、然るに右兩教の教徒は、此氷炭相容れざる兩思想を一身に兼併して以て均く之を果さんとするものなれば、到底其志を遂ぐる能はざるは、固より其所なりと云はざるべからざるにあらずや、是に於てか余は兩教教徒に忠告する所あらんとす、足下等が若しも専ら其教旨を遂げんと欲するならば、足下等は必ず國家の制取を脱して、國家外の人民とならざるべからず、但し若し、又専ら國家臣民たるの責務を盡さんと欲するならば、教徒たる地位

を去て、純乎たる國家臣民とならざるべからず、足下等は必ず二者の一を選択せざるを得ず、足下等若し教徒たる地位を去て、純乎たる國家臣民たらんと欲すれば、其事甚だ容易なりと雖、若し之に反して國家臣民たるの地位を去て、純乎たる教徒たらんとするならば、其事至難に屬すれば、殆ど策の施すべきものあらずと雖、余は試みに一策を授けん歟、并は他にあらず、足下等は相合同して文明各國に説き、各國より各幾分の土地を足下等に寄附せしめ、以て一の教會國を建設し、全く各國の羈軛を脱せる一種の中立共和國となし、而して此教會共和國より各國に傳道士を派遣し、専ら國を見ず、單に世界を見て教を布くこととなし、且つ常に各國間の平和親睦の爲めに周旋して、務めて各國間の戦争を避けしむるに努力するとともに、茲に始めて世界教たるの眞性を有するものとなるを得べし、然るに再思すれば、此教會共和國は單に思想的に止まりて、到底實現的となるの望あらずして、所謂無何有郷に過ぎざるべしと雖、然かも足下等をして實に教旨を遵守して、不偏不黨的に慈悲

忍辱若くは使打類の主義を遂げしめんには、此の如き術を措て到底他策なかるべしと信ず。

博士の議論の大綱は以上の文中に在りて盡せり、譯もなく讀過すれば、如何にも御尤ものやう聞ゆれど、今一々推理的に論難すれば、博士の説は矛盾極まる僻論であつて、これが自然法、因果法の二法則を唱へ、進化論を主張する人の議論とは、どうあつても思はれぬ、故に極めて簡短に博士の論旨を駁撃して、博士をしてその非を覺とらしめん、抑も宗教家即ち佛教家にせよ、耶蘇教徒にせよ、日本臣民にして佛教家たり、耶蘇教徒たるので、佛教家たり、耶蘇教徒にして、而して後に日本臣民に非ず、是を以て内閣總理大臣と雖も、日本臣民にして總理大臣たるので、總理大臣にして而して後ちに

日本臣民でないのである、乃ち古人も謂つた如く、白馬は馬にして白いので、白くして然して後ちに馬でないのと一つである、加藤博士の如きも、日本臣民にして文學博士法學博士たり、樞密顧問官たり、男爵たり、若しくは進化論者たり、科學者たりにして、然して後ちに日本臣民でないのである、蓋し吾々人類は、己れの生活を成存せんが爲めには、各々其職分を奉ぜんければならぬ、是に於て始めて其職分が、國務大臣となり、或は顧問官となり、宗教家となり、又は科學者となると雖も、本と是れ等しく日本臣民にして、生活成存を目的として斯く分職する者と知らねばならぬ、であるから今我佛教哲理上の論法で言ふ

ときは、或る論者も云はれし如く、人には人と人民との二つの職分があつて、一箇人の職と、人民としての職の二つの者は、本と一人一職にして、其目的の左右に因りて二と分れたのである、其譯は最初萬物の靈長たるものを、人と云ひ、次に人民とは衆人の群居する者を云ひ、又之を國民と云ふ、是れ人と人民とは、其生活の目的を達せんか爲め、其職が分れて二となつたのである、而して其箇人の職とは、凡そ人たる者其職を奉じて、各自々立の生活を遂ぐるを以て目的とする、之を一箇人の職と云ひ、又之を獨立の生活と云ふ、次に人民の職とは、即ち上みに所謂一箇人の職と異ならざれども、凡そ人民たる者は此職を以て己れ一箇の生活を計る而已にあらず、自國の國力を養成するを以て目的とするので、之

を人民の職と云ひ、又之を人民の本分と云ふ、然るに獨り己れ一箇の生活を計るを知りて、國の生活を計るを知らざる者は、皆是れ人と人民との何に者たるを知らざるより致す所で、彼の牛馬の生活と選ぶ所はないのである、斯様なる人は之を動物と云つてもよろしい、又斯様なる人の邦土は動物國と云つてもよいのである、斯の如く論じ來れば、前に掲げた博士の議論は、成立しないのである、又博士は國家主義と世界主義と相容れざるもの、如く論ぜらる、けれど、予は決してさうは思はない、その所以如何となれば、國家とは別に世界の外にあるものでなく、國家と國家の集合體は即ち世界であるから、國家主義とは世界主義を縮めたものと云つてもよからう、勿論世界各國とも國體や制度は異なる

けれども、博愛主義は一つでなければならぬ。國家主義の窮竟目的は世界主義ならざる可からず、語を換へて謂へば國家主義の進歩發達したるものが、即ち世界主義となるのである、之を吾々の専門語を以て謂へば、凡そ物の理を解釋するに行布と圓融との二法を以てす、即ち行布とは差別を云ひ、圓融とは無差別を云ふので、眞理を説明する場合には、行布即圓融、圓融即行布と云ふ、今此理を國家と世界との上に於て説くときは、即ち差別は國家主義で、無差別とは世界主義である、斯の如く論ずれば國家主義と世界主義とは、決して相容れざると云ふ理はないのである。博士は世界萬國全人類に對し一視同仁なる慈悲忍辱主義若くは使打頼主義と、宗教家が戦争に際し、自國の勝利敵の敗亡を神佛に祈禱

するとは、氷炭相容れざる矛盾であると云はるれど、之は大なる誤解である、今吾が日本帝國の上に就て論ずれば、至仁至聖なる天皇陛下が、國家の隆昌と臣民の慶福とを以て中心の欣榮とし玉ふと同時に、至誠を以て外國との睦誼を全うし、一視同仁なる博愛主義を以て、世界の平和を保つことに務め玉ひつゝ、あれども、若しも一旦世界の平和を破壊せんとする敵國が顯はるゝときは、世界の平和を保たんには止むを得ずして之と戦を宣し給ふべく、日本臣民としては、假令慈悲忍辱主義、使打頼主義を奉ずる宗教家と雖も、干戈を執て敵に向ひ、敵國の敗亡を神佛に祈禱するのは當然である、その所以は世界の平和を保たんが爲めである、是等は佛教で云ふ折伏主義であつて、慈悲忍辱主義、使打頼主義を奉

する意と少しも矛盾する所はないのである、博士は又曰く、

但し余が斯く論ずるときは、足下等は恐らくは左の如き旨趣を以て辯護するならん、曰く、佛の慈悲忍辱、基督の使打頬の主義と云ふも、強ち此の如く絶對的なるにはあらず、義不義と善不善とに對しては、自ら差別なき能はず、世を害し民を虐する者に對しては、之を責め之を罰するの要あるは固より論なし、故に教徒たる者は義を勸め善を助けて、不義不善を此世界より排除することを以て責務とせざる可らず、所詮は唯義と善とを兵器として、不義不善を倒すにあるのみ、而して國家臣民たる者の責務も、亦義と善とに與みして不義不善を惡むに外ならざれば、教徒と國家臣民との責務に於て決して矛盾する所あらざるべしと、果して足下等の言の如くならば頗る是なりと雖、余は尙足下等に服する能はざるものあれば茲に簡略にして然かも明晰なる比喻を設けて一問を發し、以て足下等の急處に留めを刺さん、是れぞ最後の一刀なりとす、曰く、吾が邦若し他日某一國と戰端を開くとあらんに、不幸にして義彼

にありて不義吾にあるとあらば、換言すれば彼は師を興すの名を有し、吾は其名を有せざるとあらば、實際あり得べきとあらざれども、足下等は吾が邦は宜く速に其非を悔ひ、戈を倒にして降を敵の軍門に乞はざるべからずとする乎、將た假令義彼にあり不義吾にあるも、今に迨で戈を倒にして降を乞ふが如きは、吾が邦の大耻辱なり、斷じて爲すべからず、寧ろ力を盡して非を遂ぐるの優れるに如かずとする乎、足下等の意若し甲にあらば足下等は教旨に忠にして、國家に不忠なりとせざるべからず、但し足下等の意若し乙にあらば足下等は國家に忠にして、教旨に不忠なりとせざるべからず、足下等の二種の資格と二種の責務とは、到底矛盾せざるを得ざるにあらずやと、余が此最後の一刀も尙足下等の急處に中らざるや否敢て質す。

此の博士の奇問に對し、渡瀬常吉君は鋭利なる筆鋒を揮つて左の如く反駁して居られる、

博士自らも「この問は實際あり得べき事に非ざれども」と辭つて居る

からとて、實際あり得べからざる問題を出して、人に答を望むとは不思議の事で、凡そ人の前に提出する問題は、なるべく實際事實または實際あり得べきとでなくては、問を出した主意には稱はぬ、然るを實際あり得べからざるを提出して答を迫り、これが最後の一刀だと呼ぶのは、譯が分らぬ、如何なる難問題でも否それが難問題であればある程、空妄なる問題となるばかりで、一向恐ろしからぬ一刀である、斯様に空妄なる問題には答へて見た處が無用の事であるまゝか、答へて見ないと云つて博士の勝利に歸する譯でもない様である、何んとなれば元來が實際あり得ぬ問題であるからである、若し此加藤博士の謂はるゝが如き場合が、眞實にあり得る者と假定するならば、吾人は加藤博士こそ實に不祥なる假定を爲す人として、其言葉の不謹慎なるを悲まねばならぬ、何せなれば吾が邦が他日某一國と戦ふ時に、我は、全然不義にして戦ふべき名も有せざる場合を豫想すると云ふは、此れは日本人に一人として正義の念を有する者なきを假定する者であるまいか、一人も義と善

との精神を有せずと假定するは、やがて上御一人に於かせられても不義不善の精神を有せらるゝとの假定となりはせまいか、加藤博士の問題を推し詰むれば茲に至るべき者ではあるまいか、假定とは云へ餘りに不謹慎なる問題である、吾人は日本帝國は二千五百有餘年來養ひ來れる道義心を有するを知るのである、此の道義心に由て斷じ、之を世界の道義に考へて之を斷じ、之を自家立國の大精神と其の世界に於ける天職とに鑑みて之を斷するが故に、萬に一も加藤博士が假定された様な、全然日本が不正義の場合のあり得べからざるを信するのである、萬萬さる場合なしと信する吾人に取つては、之に答ふるは只だ加藤博士が強いて陥れんと巧まれたるデレンマに罹るばかりである、吾人は博士がありもせぬ事を假想して、基督教や佛教徒をデレンマに陥らしめんとせらるゝ心事を陋とせねばならぬ、而して却つてそれで以て自家の面目に泥を塗つて居らるゝに至つては、實に博士の爲めに嘆かざるを得ないのである、そこで吾人が此の奇問に對する答は、極めて簡短で



左の通りである。

博士は斯様の場合が實際有り得るとせらるゝか、それならば不敬である、實際は何處迄でもないとせらるゝか、それならば答ふる必要がないのである、吾人が如此き答を見て定て博士は卑怯なる男と云はるゝかも知れぬ、併し博士の如くに元來人を陥れんとして構成された質問に答へて、博士に其豫想通りに捕へらるゝも勇士とは云へない、世に若し實際あり得ぬ事を假想して、人を困らしむるを許すならば、ドレ丈でも質問の種子はあると思ふ、博士は若し其の父母が、爾の進化論は世を害する者であるから之を焼く、さもなくば三代迄の勘當をすると云はるとすれば、博士は如何にさるゝであらうか、進化論を焼かるゝに於ては、學術に忠ならず、此を主張さるゝならば三代迄の勘當となつて、父母に不孝となるであらう、若し余が博士に向つて此れが最後の一刀である、博士御答へは如何で御座ると、威丈高に云ふたとすれば、博士は定めて狂氣じみたる事を問ふ男であると云ふて、一笑さるゝであらう、此れ

が狂氣じみて一笑に附すべき者であれば、博士の奇問も狂氣じみて一笑に附すべき者ではあるまいか、博士も堂々たる日本の或る學術を代表せらるゝ方ではないか、それがたわいもない小兒の見に等しき問題を出して、強いて人を苦しめんとせらるゝは、博士に似合はしからぬ、噴飯の種子たるばかりではあるまいか、しかし吾人は博士に告げて置きたい、それは若しも我が帝國の存在を危ふし、世界の平和を亂し、不義不正を行はんとする者があれば已むを得ず、我が國家は干戈を執つて膺懲するの覺悟がなくてはならぬ、而して此の時には吾人は基督教徒たる日本國民として、最も勇敢に戦ふ積であるとの一事である、思ふに博士が右に云ふた様な、危険にして笑ふべき奇問を發さるゝのも、強ち博士の酔興ではなく、全く博士が基督教を世界教とさるゝ、意義が、形ちに拘泥し過ぎて居るから、如此き誤謬に陥られた事と思ふのである、吾人は博士が此の點に就て三思せられんことを望むのである。

と答へて居られる、斯は如何にも巧にして痛快なる答であ

つて、博士は却て留めを刺されて居られる、予はこゝ一番博士の術中に陥つて、極めて簡短に明確なる答をするに躊躇しない、今答へをする先きに一寸序に述べて置きたいことがある、それは外でもない、昔、山崎闇齋、群弟子に問うて曰く、方今中華(支那)が孔子を以て大將と爲し、孟子を副將となして、數萬の兵を率ゐ、來つて我日本を攻むる時は、吾黨孔孟の道を學ぶ者、之を如何と爲さんと、弟子咸答ふるゝ能はずして、小子等爲す所を知らず、願くば先生に其説を聞かんと、そこで闇齋誨へて曰く、若し不幸にして此危に逢はゞ、則ち吾黨孔孟の道を學ぶ者、身に堅を被り、手に戈を執つて之と戦ひ、孔孟を擒にし、國恩に報ずる、此れ即ち孔孟の道なりと、後ち門弟等この事を以て伊藤東涯に告げ、吾が闇齋先生の如

きは、聖人の旨に通ずと云ふべく、然らずんば安んぞよくこの深義を明にして、これが説をなすことを得んやと、東涯笑うて曰く、諸君、幸に孔孟の我邦を攻むるを以て念と爲す勿れ、予必ずこれ無きことを保證せんと、(先哲叢談)丁度加藤博士の奇問はこれに類して非なるもので、其問の中の「實際あり得べきこと」にあらざれどもとあるのは、伊藤東涯の孔孟は我か邦を攻めるやうなことは無いと云うた語を借りたのであらうけれど、唯加藤博士の譬喩は、實際あり得べからざる不祥の語だけに罪が深い。而して余の答へは若し博士の奇問の如き場合が、萬が一にもあつた時は、吾々日本國民は死力を盡して國家の爲めに戈を執つて戦ひ、敵を鏖盡せんければならぬ、何となれば吾日本帝國は、博士の比喩の如

き不義の師を起すが如きことは、斷じてないからである。博士は彼の敵も味方をも一視同仁主義なる赤十字事業の如き少しも御存じないのであらうか、此に至つて博士の論法を假りて之を言へは、これぞ博士の急所に留めを刺す最後の一刀である。博士はこれでも猶急所に中らずといふや否や、敢て質す。

#### 第四章 「吾國體と佛教」を駁す

佛教といふ宗教は、釋迦文佛が三千年の昔に在りて、種々の哲學宗教を研究綜合して、即ち人間の精神上、萬古不變の眞理に基きて説きたる大宗教ゆゑ、その教理の高尙深遠なることは、實に驚嘆するの外は無い、而してこの教が、欽明天

皇の時代に吾國に來り、其の後推古天皇の世に及んで、不世出の偉人聖德皇太子が、これを崇敬信仰し給ひ、この教理を理想化して、各般の文物典章を創始せられた、太子が始めて十七憲法を書かせられ、天下の大法として制定せられたのは、即ち今の帝國憲法の前驅であると思ふ、その聖德太子の書かせられたる憲法の第二條に「三寶とは佛法、僧なり、四生の終歸にして、萬化の極宗なり、何れの世としてか、何れの國としてか、是法に嚮はざらん」と云ふ文があるが、之が日本で佛教を弘むる基になつたのだ、この時代よりして佛教と云ふ宗教は、殆ど吾が皇室の御物の如くであつて、之を天下に弘めたまふときは、總て勅命を以て弘布せられたのである、それであるから代々の聖天子が、佛教の上に深き御信仰を

有せられたのみならず、御在位中にも法號を用ゐ給ふもあれば、又必ず御位を後の天子に譲りたまひし後は、何々院とか、何々法皇とか謂つて、出世間の御身になられた、殊に吾皇室の中興とも申すべき、天智天皇の如き、或は又自ら三寶の奴と仰せられた、聖武天皇の如き、或はまた桓武天皇の御信仰の如きは、實に熱烈であつた、その御子孫の宇多天皇や後宇多天皇は、全く持戒堅固の僧正にまでおなり遊ばされたのである、斯の如く佛教と皇室との關係は、實に密接重大なる間柄であつて、その頃より近代に至る迄の御詔勅などは、佛教と重大なる關係のあるを、のたまはせられたるものは、實に數ふるに遑なき程である、殊に聖武天皇の天平十三年三月、護國、滅罪の二個寺、即ち國分寺を國毎に立てさせ

られ、且つ自ら寫させ給ひたる、最勝王經を七重の寶塔に安置せられた、其時の詔勅を拜するに曰く、『代々の國王を吾寺の壇越とす、若し我寺興復すれば、天下興復す、若し我寺衰弊すれば、天下衰弊す、若し後代の聖主賢卿、此願を承け成ずることあれば、乾坤福を致さん、愚君拙臣、此願を改め替ゆれば、神明訓を効さん』と宣ふた、その後また後宇多天皇は、二十五ヶ條の御遺詔を、御手づから書かせたまうた、その内に『我後に血脈を繼ぐの法資と、天祚を傳ふるの君主と、盛衰を同うすべし、興替を伴にす可し、我法斷廢すれば、皇統それ廢せん、吾寺興復すれば、皇業安泰ならん、努力せよ、吾が此意に背いて悔るゝ莫れ』と仰せられてある、この詔勅に依れば、吾が佛教を廢する時は、吾皇統も廢するぞ、佛教と皇室とは、盛

衰を同ふすると云ふことを忘れて、後悔せぬ様にせよと仰せられたのである、かくの如く佛教と吾が國體との關係は、實に重大なる譯であつて、何れの宗派と雖も、その開宗の初めには、尊皇崇佛と并立して弘めたものである、傳教大師の如き、始めて天台宗を開く時には、畏くも桓武天皇の御信仰を得て比叡山を創始し、尊皇としては玉城鎮護を標榜し、崇佛としては一乘圓頓の道場となし、乃ち其寺は其御代の年號を其儘用ゐて、延曆寺と稱した、又弘法大師の開宗したる眞言宗は、其本山は皇室より建立せられたる所で、之を教王護國寺と唱へた、また曹洞宗の開祖道元禪師の開いた越前の永平寺は、勅願によつて建てられたので、皇室の直轄であつた、また臨濟宗の妙心寺や、天龍寺などは、至尊の離宮をそ

のまゝ寺となされたのである、また浄土宗の法然、眞宗の親鸞、法華宗の日蓮、抔は、時の政府から勅勸を蒙むるやうな場合もあつたけれども、浄土教は王法爲本を以て教理と爲し、日蓮宗では立正安國の四字を以て開宗の眼目として居つて、浄土宗の知音院も、法華宗の身延山も、皆勅願の道場である、かくの如く何れの宗派でも、皆我が皇室を大檀那として廣まつたものである、その後武家が天下の政權を擅になせし以來、皇室の御威光が衰へ、畏れ多くも紫宸殿の御庭は、兒守りの遊び場となり、皇室の御會計も困難で、殆ど三年も即位式を行はせ給ふことが出来ない事があつた、斯かる時にも佛教と皇室とは、親密の關係をもつて居つて、或は本願寺抔より數萬圓の金を献納して、御即位の御式を行はせ給ひ

たることあり、今日と雖も御所號のある寺々二十八ヶ所には、宮内省より御下賜金あり、また代々の聖天子の御遺骸を埋め奉る京都泉涌寺は、何事も皇室に於て世話せられ、先年同寺の焼失したる時にも、皇室より御再建ありて、御代々の御年祭や御例祭のあることに、靈明殿に於て御法會を行はせられ、また唯今でも各宗の祖師に大師號を賜はることもあれば、彼の曹洞宗の管長などにも、その更迭毎に其後任者には禪師號を至尊より賜ふを特例とす、殊にまた眞言宗の修法なども、昔しは眞言宗の僧侶が宮中に祇候して、至尊の玉體に修法を行ふたのであるが、今日では 天皇陛下が毎年一月八日から東寺へ勅使を差向けられて、眞言宗の僧侶が至尊の御衣の御加持を行ふの式がある、其他皇室と佛教

との關係は、實に離るべからざる密接の關係があつて、假令政教は分離しても國家は國家、皇室は皇室で、佛教と皇室とは、政治の外に超然として重大の因縁があるのである。また釋迦の遺訓には、吾大法は國王大臣に附屬すともあり、或は佛教信者が、國王の恩、佛の恩を奉ずることを説いてあつて、國王の恩徳報謝の爲めには、身命を惜しまず忠節を盡して、大法に御歸依遊ばさるゝやうにせねばならぬと説いて居る、かくの如く佛教には我が皇室の御信仰を得て、國體擁護に盡しつゝあるのである、然るに加藤博士は深く佛教の事を知りもせぬに、佛教のちよつとした瑕瑾を捉へ來りて、佛教は國體に害があるとか、佛教は社會の下流に信仰せられつゝあるものであるなどと云はるゝが、實に笑止千萬であ

る。又博士は聖武天皇が自ら沙彌勝滿と法名を用ゐたまひ、また三寶の奴と稱したまひしを咎むれども、こは實に吾々が最も聖武天皇の聖慮を讚美し奉る所である、蓋し聖武天皇は、斯かる聖語を出したまひたるは、即ち至貴至重なる本心の自由を發揮したまふと同時に、天照大神は宇宙絶對の存在神なり、最高の實在なり、一切現象の根源なり、現象界を超絶したる處に存在し給ふ(盧遮那即ち遍一切處神として、かくの如く稱し給ふたのである)、博士は本地垂跡の説を稱して、無禮呼ばはりをせらるゝが、こゝが即ち佛教家が偏狹なる國學者や儒者などより、見識の大なる所で、吾が天照大神を宇宙遍一切處の神として、大眞理を發揮したものである、博士の識見は實に狹隘なもので、我が至尊の御先祖たる

天照大神を、日本一國の專有物の如くするとは、實に自ら神徳を狭むる者である、この事は後に至つて云ふつもりであるから、茲では云はないが、博士は前に云ふ如く、代々の至尊が最も尊崇したまひたる佛を稱して、化物的崇拜物などと云ふのは、取も直さず、代々の至尊を侮辱すると同様ではあるまいか、また博士は本地垂跡説は、國體を汚すなどといはるれど、聖武天皇が盧遮那大佛を造り給ひし時、天照大神と盧遮那佛と混同するの舉は、神意に戻る無きやを畏れたまひて、僧行基が聖旨を奉じて伊勢に詣りける時、大神自ら宣ひし神語は、載せて本朝神社考及び神宮雜記等に在り、之れをも博士は打消すか、加之、佛法未だ吾國に到來せざる前、即ち垂仁天皇の二十六年十一月に、天照大神と如來とは一つ

であることを、本朝神社考に記載あり、抑も如來とは、佛教にては人格的に佛を呼ぶの稱なれども、之れを解釋すれば如とは不變の義で、來とは隨縁の義であつて、不變とは宇宙の本體を云ひ、隨縁とは起滅する宇宙の萬有を稱したるものである、然らば即ち我が天照大神を天の主宰神、即ち宇宙の一切萬物を支配したまう主宰神としたのである、かくの如き廣大無邊の理は、自然進化の理法の檻内に繋がる、博士の如きは夢にも知らざる所である、斯く論じ來れば吾佛教は、吾國體に對し夙に合一調和して、益々國體をして發揮せしめつゝある者である、猶博士は、社會の下流に至つては、崇佛の盛んでありしのみならず、今日と雖も衰へたと云へぬけれども、併し自今教育が漸々進むに従つては、到底衰滅

するの外はなからうと思ふ」と云はるれど、博士の所謂葬式回向の勤めや、一部の迷信的儀式的佛法は或は滅亡するであらうけれども、人の知識が發達するに隨ひ、眞の佛教々理は益々發達し、世界一般の人類が信仰するやうになるは、蓋し疑を容れざる所である、猶一言し置く、この章に於て博士は、徳川幕府の代となつてから、中流以上の社會は儒教を奉じて佛教を信じなかつたやうにいひ、又博士は儒教の治國平天下の常識的な所のみをいはるれども、儒教の内でも中庸とか易とか云ふ書物は、形而上の高遠なる理を説いてあつて、幾んど佛教に説く所の哲理とは些しも違はないのである、若し博士が疑はるゝならば、乞ふ易經や華嚴經を繙いて熟讀玩味せられたい。猶言つて置きたいのは、佛教の眞理



は、皇室至尊の御信仰の深きと否とに依つて、盛衰するものでないのであるが、博士は科學的に論じて、佛教は吾が國體に害を與へたと云ふから、斯く昔からの國體と佛教との關係を繰り返して、其助けとなつたけれど、害とならなかつた事を論じたのである。

### 第五章 『基督教と吾國體』を駁す

前章に於て佛教と吾國體といふ題で、佛教が大に吾國體を害したといふ加藤博士の説を反駁して、佛教が吾國體に同化して、其國體を擁護したる點を述べたが、今また博士が基督教が國體を害せんとして居ると云ふ事を駁して、基督教も吾國體に融合して、その發達をなさしめなければなら

ぬ事を述べようと思ふ、基督教の事は予は門外漢であつて、その教理を深くは知らぬけれども、蓋しその教理は深遠高妙にして、歐米文明國の思想界を支配し、教祖耶蘇基督が人格の高きと、その教理の根本たる博愛主義及び天の主宰を信仰し、『天國は汝等の間に在り』てふ福音を道破して、俗悪なる世界をして天國たらしめんとする誓願は、吾々の常に嘆美して措かざる所である、由來佛教にせよ、耶蘇教にせよ、その教理の根本原理は、前にも云ふ如く、宇宙の實在を以て大原故郷とし、大哲理を含有する大宗教である、であるから吾吾人類に於ける倫理の根本も亦た源をこゝに發しんければならぬ、此の點に於て余は常に倫理と宗教とは一つのものならざるべからざる事を信ずるものである、今日世間の

倫理學者や宗教家は、多くは宗教と倫理とを箇々別々に論じ、或は宗教と倫理とは没交渉と云ひ、或は宗教は超道德と云ひ、或は倫理は相對的善なるので、宗教は絕對的至善であつて、相混合すべからずと論ずるものさへあり、勿論今日吾吾人類社會に於て、行はるゝ所の倫理即ち人の道なるものは、多く表面的虚偽を以て人道を虚飾し、倫理なるものゝ愛の實在より發せざるべからざることを知らざるより、宗教と倫理とを二つに區別するのである、自他平等の博愛主義を倫理の根本とすれば、慈悲博愛を根本義とする宗教と、同一ならざるべからざるは論を俟たざる所である。こゝで一寸述べて置きたい事がある、それは外でもない、吾日本帝國は歐洲各文明國に優れ、信教自由の國なる一事である、歐洲

の各文明國は大概一定の國教を有して居る、佛蘭西及び其他の舊教國は固より然りて、英國及び獨逸の如き新教國に於ても、尙國教の制を執つて居つて、唯他の宗教信仰を禁制せざるばかりである、故にかれに在りては國民一般の精神教育は政府の機關である、政府の公認して保護する宗教の組織によりて普及せしむるのである、吾國は法津上は勿論事實上に於ても所謂國教と云ふものは無いので、國民道德の大本を宗教の力にのみ依頼せぬのは、これぞわが國體の誇るべき所である、加藤博士は佛教も基督教も世界教であるから、國家などは少しも眼中に置くもので無い、唯佛又は神と人間との關係といふことのみに着眼して居るのであるから、國家の爲めには殆ど利となるべきもので無いと云

はれるが、基督教も佛教も、國家を外にして教を説いたのでないとは、佛教聖典及耶蘇の聖書を熟讀玩味すれば明瞭に分るのである、勿論佛基兩教の説く所は、廣大にして國家より進んで一般世界をも包含する教理であるが、佛教家も基督教徒も余が常に所謂日本人にして、基督教徒たり佛教家たりであつて、基督教徒たり佛教家にして而して後に日本國民で無いのであるから、此事は論理上能く博士の注意を請ひたのである、殊にまた佛教にせよ耶蘇教にせよ、佛又は神と人間との關係を主眼として説くから非常なる尊嚴あり價值あるので、大宗教の成立する所以である、若しも大宗教にして、凡俗世界の機械的學理をのみ説くに止るなれば、實に卑むべきものであつて、何の價值も尊嚴も無のである、

加藤博士の説に據れば日本人にして佛教を信仰すれば佛教に同化し、又耶蘇教を信仰すれば耶蘇教に同化するやうになるのであるが、決してさうでは無い、前にも云ふ如く日本人にして佛基兩教の信仰者となれば、基督の教も釋迦の教も、皆日本化して、吾國體に理想化せしむることを得るのである、又博士は基督教では一切の人間はみな罪惡に陥つて居るから、この罪惡を放れんが爲めに、基督が世に出たのであると云ふのであれば、天子でも王侯でも一般人民でも、皆悉く罪人視してその罪惡を償はんには、只管唯一眞神を信仰し、之に祈禱せしむるより外は無いとするのであるといふ事を咎むれども、余を以てこれを見れば、こゝが即ち眞宗教の値のある所である、何故ならば王侯でも一般人民でも

決して罪の無い完全無缺とは云はれぬ、今日一國の獨立をはかる爲め、善事ではないが止むを得ずして戦端を開き、世界の平和を保たんがためには、實に忍びずして兵を起す事もある、是等は決して純正なる慈悲圓滿のことゝは云はれぬ、であるから至仁至聖なる至尊でも戦争は平和を保ち、善良なる世界に進めん爲め、止むを得ず征伐することを宣し給ふてはないか、又個人としても法律上の罪人とはならずとも、眞正圓滿にして罪のなきものは殆ど無いと云つてよからう、況や法律そのものも決して完全なるものとは云はれぬではないか、宗教で説く罪とか罪障とか云ふものは、慈悲圓滿の神とかに比して云つたもので、決して之れを咎め立てすへきてない、博士は斯くの如き事を咎められるけれ

ども、博士の進化論では人間は固と猿の進化したものであるとし、動物を人の先祖とし、又人間と動物を區別すをのを非常な間違のやうにいはれる、之れ眞に吾が神聖なる至尊に對し奉り、又國體に對し不敬の論法ではあるまいか、又博士は「日本の國體に同化するなどは到底出来ぬことである、日本の國體に同化せんとすれば、既に基督教の本旨は全く破壊されて了ふのである、基督教なるものが斯くの如き性質を固有して居る以上は、何としてもこれが日本の國體を害せぬ譯にはいかぬと思ふ、日本は世界萬國無比の族父統治であるから、皇祖皇宗と天皇の外に至尊として崇敬すべき筈のものは一もない、此至尊の上に尙唯一眞神を戴くなどと云ふことは、決して國體の許さぬ所である」と云はる

るが、これは甚だ狭い量見で、吾國體は博士の云はるゝ如き、  
 狹隘なるものでない、即ち前にも云ふ如く、耶蘇の所謂唯一  
 眞神は吾皇祖天照大神の權化ではないか、權化とみれば差  
 支がないではないか、(佛敎の卍字耶蘇敎の十字、何れも原始  
 時代の太陽神を表顯せしもの、此學説に就ては意見あれど  
 も茲には云はずしてみれば吾至尊にても、皇祖天照大神を  
 崇敬したまふは、言を俟たざる所である、曾て至尊の詠じ給  
 ひたる御製に、

とこしへに民安かれといのるかな

吾か世をまもれ伊勢の大神

また皇后陛下の御歌にも、

ひとりのみおもふ心のよしあしも

てらしわくらむあめつちの神

神風の伊勢のうちとの宮はしら

ゆるきなき世をなほいのるかな

其他憲法御發布の時の御告文にも

皇朕レ謹ミ畏ミ皇祖皇宗ノ神靈ニ誥ケ曰サク皇朕レ天壤無窮ノ宏謨  
 ニ循ヒ惟神ノ寶祚ヲ承繼シ(中略)皇祖皇宗及ビ皇考ノ神佑ヲ禱リ併セ  
 テ朕ガ現在及將來ニ臣民ニ率先シ此憲章ヲ履行シテ徳ヲザラムコト  
 ヲ誓フ庶幾クバ神靈コレヲ鑑ミタマヘ

とあり、吾々日本國民にして宗教家たる者は、耶蘇敎徒の奉  
 ずる唯一眞神も皆これと同化せしめなければならぬので  
 ある、然るに博士は耶蘇敎徒の一少部分の異行者を咎め、或  
 は些々たる學校の名稱を捉へ來つて云々するが如き、實に

大學者に似合はざる態度である、若し耶蘇教徒にして心得違への者あらば、諄々説いて眞の基督教徒とならしめなければならぬ、憲法二十八條には、

日本國民ハ安寧秩序ヲ妨ゲズ及臣民タル義務ニ背カザル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

とあり、公爵伊藤博文氏の憲法義解を見るに曰く、

中古西歐宗教ノ盛ナル之ヲ内外ノ政事ニ混用シ、以テ流血ノ禍ヲ致シ、而シテ東方諸國ハ又嚴法峻刑ヲ以テ、之ヲ妨禁セント試ミタリシニ、四百年來信教自由ノ説始メテ萌芽ヲ發シ、以テ佛國ノ革命、北米ノ獨立ニ至リ、公然ノ宣告ヲ得、漸次ニ各國ノ是認スル處トナリ、現在各國政府、或ハ其ノ國教ヲ存シ、或ハ社會ノ組織、又ハ教育ニ於テ、仍一派ノ宗教ニ偏祖スルニ拘ラズ、法律上一般ニ各人ニ對シ、信教ノ自由ヲ予ヘザルハアラズ、而シテ異宗ノ人ヲ戮辱シ、或ハ公權私權ノ享受ニ向テ、差別ヲ設ク

ルノ陋習ハ、既ニ史乘過去ノ事トシテ、復其ノ跡ヲ留メザルニ至レリ、此レ乃信教ノ自由ハ、之ヲ近世文明ハ一大美果トシテ、看ルコトヲ得ベク、而シテ人類ノ尤至貴至重ナル本心ノ自由ト正理ノ伸長ハ、數百年間沈淪茫昧ノ境界ヲ經過シテ、纔ニ光輝ヲ發揚スルノ今日ニ達シタリ、蓋本心ノ自由ハ、人ノ内部ニ存スル者ニシテ、固ヨリ國法ノ干涉スル區域ノ外ニ在リ、而シテ國教ヲ以テ偏信ヲ強フルハ、尤人知自然ノ發達ト、學術競進ノ運歩ヲ障害スル者ニシテ、何レノ國モ政治上ノ威權ヲ用ヒテ以テ、教門無形ノ信依ヲ制壓セムトスルノ權利ト機能トヲ有セザルベシ、本條ハ實ニ維新以來取ル所ノ針路ニ從ヒ、各人無形ノ權利ニ向テ、濶大ノ進路ヲ予ヘタルナリ。

この憲法の明文によれば、至尊が吾々臣民に、信教の自由を與へたまひしことは、世界に誇る可きことであつて、且つ人の本心の自由の尊重すべきことは、伊藤博文氏の義解の説

の如くなるにも拘はらず、博士は頑固にも佛教や耶蘇教を信ずれば、國體に害ありなどと放言するは、取も直さず憲法の名文を無視し、至尊の聖旨を誤るものと云はねばならぬ。又博士は「耶蘇教徒の最も敬愛するものは、獨り全知全能の唯一眞神である、この唯一眞神の前には、尊卑貴賤は無い」といふが如き觀念は、決して放擲することは出来ないには相違無い、今日の國家は眞の國家では無い、眞の國家は特に天國である、而もこの天國を地上に建造するのは、吾々の務であるなどと云ふ妄想は、決して基督教から離れることは出来ぬに相違無い、基督教は箇様に頑固なものであつて、この頑固な性質を除いて了へば、基督は既に亡びたと同様であると思ふ」と云うて居らるゝが、前にも云ふ如くその所謂唯

一眞神とは、吾國體の大原故郷なる天照大神とすれば、至尊は天照大神の寶祚を繼承し玉ふのであるから、その御前には貴賤尊卑は平等である、殊に博士は今日の國家社會を目して、完全無缺なるものと思ふのであらうが、吾々は決してさうは思はない、今や種々の進歩發達を経て純潔なる國家社會を建築せんと進みつゝあるのではあるまいか、博士の奉ずる所の進化の道理に依つても、此等の道理は分りさうなものである、耶蘇の天國を地上に建造するといふのは即ち、今の不完全なる國家社會を進歩せしめて、完全なる國家社會たらしめんと務めつゝあるのである、實に博士に對してはお氣の毒な言ひ分ではあるが、嘗て博士は「國體新論」とか云ふ一書を著して、日本の國體を稱して野蠻の遺物であ

る、天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云ふが如き、言論を主張せられた事がある、博士は是等の著書は、政府より自ら絶版するか、然らざれば政府より絶版せしむるとの命を受けて、自ら絶版したりと云はるゝが、當時元老院議官たりし故海江田信義、鳥尾小彌太等の諸氏は大にこれを憤り、一面政府にその絶版を勧め、一面博士に向つて斯くの如き説を取消すか、然らざれば所決せよと迫られ、止を得ずして絶版したりと、此は余が嘗て海江田子爵より直接に聞きたる所である、此の一事を見ても日本國民として、且つ學者としての博士の態度を疑はなければならぬ、博士は自説を眞なりと信ずれば、何故自分の學説に殉せざる乎、斯くの如き態度を見ても、博士の進化論なるものは、一の根據な

く時に依つて變るのを知ることが出来る、惜むらくは博士にして深奥なる一の宗教心を有せられたならば、實に斯くの如き害あつて益なき著述をなさざるのみならず、自ら信ずる所を人に迫られて、降参する如き醜にくきことはなさなかつたであらう、右云ふ如き歴史を以て居る博士は、斯やうなる問題を論議するの資格があるのであるかを疑ふのである、その他この章に論ずる所の、徳富蘆花氏の説は如何であるとか、救世軍の大將ブース氏の事がどうだなど、云はるゝは、論駁する價值がないから捨て、置かう、又菊池男爵が昨年春、英國倫敦大學の招聘に應じて、日本の教育に關する講義をなしたる演説筆記を掲げ來り、非常に珍らしさうに博士は推奨せらるれども、かゝる事は夙に吾々は主張



し實行せんとして居るのだ、教育勅語に對する卑見は『教育聖典衍義』として遠からず公にするつもりである、加之、余は教育勅語の聖旨を奉じて一の私立學校を建築せんとして、去明治三十七年一月以來先輩諸公の贊助を得て之が創立に苦心し、寢食を忘れ雪蓑雨笠、諸國に行脚して之が實行に務めつゝあるのである、丁度昨年東久世伯等と巡回中であつた、菊池男爵が教育勅語に關する演説を英國に於てなしたることを新聞紙上にて承知し、吾々の主張しつゝある其一部を菊池男爵が外人に向つて演説したるを感謝して居た位である、猶茲に述べねばならぬ事は、吾國體は萬國に比類なきことは申すまでもなきことである、が、今日まで日本の國情を知らざる外人等は、或は吾國體に對し奇異の思を

なして居つたのである、が、今日吾帝國の文明の進歩著しきを見、日本の國狀を研究する學者多く出で來れるは喜ぶべき現象である、余は此章を終るに臨み、我國體と他國とに就て、一譬喩を述べて置かうと思ふ、婆娑論と云ふ書物の中に、斯う云ふことが書いてある、昔、或る深山に五百匹の猿が栖で居つたが、その内の四百九十九匹は皆鼻が無く、たゞ一匹の猿のみ完全である、然るに四百九十九匹の猿は、皆己れを完全なるものと思ひ、一匹の完全なる猿を片輪者とし、常に完全なる猿を苦しめた、されど衆寡敵せず、一匹の猿は常に苦しめられつゝあつたのである、然るに一日山神あり、猿の群集中に來りて教て云ふには、猿と云ふものは、元來鼻を有して居る筈ゆゑ、四百九十九匹の鼻無し猿は皆片輪で、一匹

の鼻あるものは完全なるものなれば、爾來この有鼻猿を尊敬して猿王と仰げよと教へた、それより四百九十九匹の猿は、初めてわが片輪なることを知り、日々多くの果物など運び來り、一匹の有鼻猿を猿王として事へたと云ふ、是れ恰もこの一匹の有鼻猿を吾萬世一系の國體を有する日本に比し、他の無鼻猿を世界の或る國々に比しては如何であらうか、斯く論じ來たれば、吾帝室は固より吾々日本國民は將來に於て、非常なる大責任を持つて居ることを、自覺せなければならぬと思ふ。

### 第六章 『科學的證明』を駁す

前にも述べし如く、博士はこの廣大無邊なる宇宙一切の

現象を、自然因果の二法則を以て解釋し、これを科學的證明と稱し、總てこの筆法を以て何事をも説明を試んとして居る、それであるから實驗的原因結果にて得たる知識ならざれば、虚妄であると云はるゝが、博士の云ふ如くならば、吾々人類は例へば春風駘蕩の頃、美麗なる櫻花の開くを見、或は牡丹の花などがよき香を放つて咲きみだれたるを見ると、直ぐに崇高なる美感を發するが如きは如何、博士の如く知つて而して後でなくては信ずることが出來ぬとならば、花の美麗なるも人々個々に植物學的に知つて後でなければならず、或ひは秋夜に月光の美を見る時なども、非常なる美感に打たれるが、これも博士の説の如くならば、月の性質を天文學的に分拆してから後でなくては、月の美感を發する

了の  
つて

ことは出来ぬ道理である、何事も科學の研究一方に偏すれば、この人間世界の藝術とか繪畫とか詩歌とか云ふやうなものをも、すっかり否定せねばならぬ、斯くなれば世の中は沙漠の大原野と一つのもので、人間は但俗物化して了ふのである、博士の如き科學萬能物質主義の人は、たゞ科學にその精神を支配せられ、科學を吾々の精神で支配すると云ふ事を自覺せぬ人である、彼の猿なるものに辣韭を與へしに、その辣韭を一枚一枚皮を剥き、終に皆皮のみにして自ら憤りたるが如き、若しこの猿がその與へられたる辣韭をそのまま食すれば、美味の口舌に上り且つ食物となりしならん、博士の科學的研究はこの猿の辣韭をむくに類せぬことはいあるまいかと思ふ、斯く論じ來れば博士の科學的證明とい

ふものは、最早それを駁するの必要なきやうなれども、猶博士のこの章に於て述ぶる所を辯難し、博士の反省を求めたのである、博士曰く、

天父だの唯一眞神だのと稱するものは、爪の垢ほどの證據もない、お化けとするの外致し方は無いではないか、科學的研究の上に證據のあらはれぬものに信を置くことは、決して出来ぬことである。

と云ふのは、吾々人類の有限的知識を以て、絶對無限なる宇宙の實在を觀測せんとするから、斯る議論が出るので、博士の是等の議論は、恰も短繩を以て深き井中に垂れ、この井中に水なしと云ふのと一つである、若し夫れ眞に水を汲まんなれば、それに適すべき長繩を用ゐねばならぬのである、博士の知識といふは如何なる程度まで、何を目的に知識知

識といふのであらうか、博士の知識々々といふは、是れまた譬へば人將に水中に没せんとする際に臨み、猶渴を説く一つで、實に譯の分らぬ事である、然し斯く云ふものゝ、博士もまた自ら知るの明あるものゝ如し曰く、

吾々人間の知識には、恐らく限度があらうから、宇宙間の事が悉皆吾々人間の知識で以て分るやうになる時代が来るであらうとも思はれぬ、到底人間の知識では及ばぬと云ふ事もあらうけれども、その人間の知識で分らぬ事柄について、彼是推察論を立てるのは甚だ間違つた事である、尤も科學上にも假定説といふものは必ずある、否假定説の方が多分で、全く眞理であると確定したものは少ないに相違ないけれども併しその假定説なるものも、決して全くの臆断説ではない、種々様々に證據を捉へ來つて、尙幾分不足のあるものを假定説と稱へるのである。

この博士の云ふ所によれば、博士も科學的研究は、とても

宇宙の森羅萬象に向つては、探究説明し得ることの出來ぬ事は自覺してゐるのであつて、博士のこの言は先づ博士の著書全部を取消して終つたものと断言することが出来る。博士は毎度繰返して日本國に於ては、天皇陛下より外に至尊として崇拜すべきものは外には決してない、天皇陛下より上位に置くべきものは絶てないのであると云はるゝが、日本國民として天皇陛下より外に至尊のない事は、今更あらためて博士の説法を承らないでも、誰あつてか天皇の外に至尊のあると思ふ者があらうか、博士の如く人間は猿の進化である、他動物と人間との區別を劃然立てるのは非自然である、と云ふ論者からすれば、人の上に至尊のあるとは、今更の如く説かなければならぬ必要があるのであらうけ

れど、吾々は天皇陛下の臣民であることを先天的に自覺して居るのである、また天皇陛下の神聖にして至尊におはしますことは、今更突然敷から棒の如く出來た事でなくして、吾々の信仰崇拜する天の主宰者即天照大神より寶祚を繼承したまふ故である、それから猶博士に謹んで御忠告申す、元來耶蘇教で説く所の唯一眞神を稱して、博士はお化け呼ばはりするが、聖天子の至誠を以て親交したまふ所の西洋各文明國の皇帝には、一般皆獨一眞神を信仰せらるゝに、博士は之をお化け呼ばはりせらるゝは、吾至尊より爵位を受け、皇室の藩屏と云はるゝ、貴族の一員たる博士としては、各國皇帝に對し無禮千萬であるのみならず、即ち吾至尊に對し奉りても、或は不臣の責を免かるゝことは出來るであらうか、博士は又曰く、

余の所論は科學的證明であると、余は自ら信するものである、それゆゑ余が決して神道者や國學者の口眞似をして國體論をするのでないことは、既に諸君が十分了解されることであらうと思ふ、神道者や國學者は吾か國體を宣揚することに於て大に効績はあるけれども、何分にも多くは科學といふことを知らぬから、今日にあつては取るに足らぬやうな議論をすることが多い、今日にあつては科學的證明の出來ることではなければ、決して議論にならぬのである。

博士よ決して懸念には及ばない、眞の國學者や眞の神道者や、決して博士の如き矛盾杜撰なる議論はせぬから、博士が口眞似をしたといふものは一人もなからうから、その邊は御心配に及ばない、それから猶一言博士に御忠告を申して置かなければならぬのは、方今人間社會は皆功利主義、

物質主義に傾き、教へずしても利己主義を主張し、利他心の  
 缺亡しつゝある時代であるのに、博士は、

予が常に利己主義を述べて利他心は本來存するものでなくして、全く  
 利己心から變性して來たものであると云ふ事を主張して居る。

と云ひ、その著『道德法律の進化』や『自然界の矛盾と進化』を讀  
 めよと云はるゝが、これは博士だけ信じて人に勧められん  
 やうに願ひたい、何となれば、博士の如き學歴と地位とを有  
 する人より唱道せらるれば、世の人心は益々利己主義に傾  
 き、終には博愛主義が亡びて全く利他心の廢滅するに至ら  
 んことを恐るゝのである。猶ほ博士は利己主義に依りて、吾  
 國體及び天皇の至尊にましますことを主張すれど、吾々は  
 決してさうは思はぬ、即ち天皇の至尊にましますを信じて

居るのは、吾々人類の靈的心性の奥底に潜んで居る、大宗教  
 心に大原を發して居るのである、即ちこの宗教心とは理性  
 をいふのであつて、吾が至尊の去る明治二十三年に下した  
 まひたる教育勅語の内にも『徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ』『博愛  
 衆ニ及ホシ』とのたまひ又『斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺  
 訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ  
 謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺  
 シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ』との聖語は、吾々は朝  
 夕捧讀してその聖慮の深きに感泣しつゝあるのである、然  
 るに加藤博士の如く、唯物主義や利己主義を以て、倫理の根  
 本とするが如きは、實に國民をして聖旨のある所を謬らし  
 め、その害毒を世間に傳播せしむるものと云はねばならぬ、

余は終に臨んで斷言して置く、博士の所論は自然法と因果法の二法則の外なきものと説くもので、博士はこの二大法に支配せらるゝものであつて、この二大法の外、否、この二大法をも支配する靈的存在物を知らざるものであることを、猶序に一言し置く、天上の明月は萬古不變であるが、世の月を観るもの、或はこれを海上に觀、或は諸れを江畔に觀、或は之を大澤に觀、或はこれを小流に觀るも、其眼界の廣狹に隨つて月を観るの感を異にすれど、その天上の月には毫も損益する所はないのである、博士所説の自然法なるものは、天上の明月を小流に觀るの類と一般である、

### 第七章 『眞善美を論じて倫理學上の

迷見に及ぶ』を駁す

眞善美の三大理想は、これを併稱して三女神とも稱するので、昔から多くの哲學者が論辯する所である、美の實在論や觀念論に就ては、希臘の賢哲や其他多くの學者が種々に論じて居ることは、今更事新らしく述べるの必要はない、蓋し吾人が美に對する時の主觀的狀態と、善に對する時の主觀的狀態と相似たる所甚だ多きを知る、又眞に對しても略ぼ同様である、而して此眞善美の三大理想中、何を最も重しとすれば、予は善を以て主眼とし、他の眞美の二大理想は善の中に包含するものであると思ふのである、抑も眞と云ひ

美と云ふも善を放れては有る者でない、是等は畢竟哲學上の問題で、學者の意見は色々であるが、余輩の常に研究しつゝある専門の宗教學上で此三大理想を比較して見たいと思ふ、乃ち彼の天台哲學などでは、吾々の心を三通りに分拆して、之を一心三觀と稱するが、三觀とは即ち一は空觀、二は假觀、三は中觀であつて、空觀は眞空で吾々の認識以上のものを稱し、假觀は吾々の認識上に現はれたる物象を稱し、中觀は空に偏せず假に偏せざる、絶對の眞理をいふのである、又佛教最高の大哲理を説く華嚴の聖典にも、この宇宙を三重に分類し、之を三重觀と云ふ、乃ち第一は眞空觀、第二は理事無礙觀、第三は周遍含容觀と云ふ、即ち是れまた第一の眞空觀は、吾々が認識以上を指し、理事無礙とは宇宙の實在と、

其間に起滅する萬有とが無礙なるを云ひ、周遍含容とはその理と事とを包有するを云ふので、予の卑見を以てすれば、彼の眞善美中の眞は天台に云ふ空觀、華嚴に云ふ眞空に比すべく、又天台に云ふ假觀と、華嚴に云ふ理事無礙觀は、即ち美に比すべく、而して又た善は天台の中と、華嚴の周遍含容とに比すべし。天台の空假中の三觀は、三即一、一即三と稱し、密接の關係を有して三諦相離れざるを云へども、其何れを重しとするかと云へば、即ち中觀を以て重しとす、而して華嚴の三重觀も亦眞空、理事無礙、周遍含容を、三即一、一即三と説けども、又周遍含容觀を主眼とす、即ち眞は華嚴の眞空、美は華嚴の理事無礙、善は即ち周遍含容に比すべし、斯くの如く眞善美の三大理想も善を以て重しとせざるべからず、な



んとなれば眞美の二大理想を判別するは畢竟吾々人類(有機體)の理性(王陽明の所謂良知)即ち至善は其根源であるからである。然るに加藤博士は嘗て丁酉倫理講演集に(第三十六號)『眞善美を論じて倫理學上の迷見に及ぶ』と題して掲げし講演によれば、眞善美の三大理想中、眞美の二つは自然界(無機界有機界)一般即ち全宇宙に存在するけれども、獨り善のみは有機界中の人類界に存するのみで、一般自然界には存するものでないといへり、實に間違つた議論で、これは十分に辯難攻撃をせんければならぬと思ふ、博士曰く、

眞は言ふ迄もなく即ち眞理にして、其裏は偽即ち不眞理と云ふものである。美は表にして其裏には醜と云ふものがある。又善は表にして其裏には惡と云ふものがある。併し一方に眞を置き、他の一方に美と善とを置て互

に比較して見ると、其間に著しい相違の點がある。眞理不眞理は表裏とは云ひながら、眞はあるものであるけれども、不眞理といふものは在るものではない。唯眞理でないものを不眞理といふのである。此點に於ては丁度寒熱の關係と同じことである。熱といふものは在るものであるけれども、寒といふものは在るものではない。唯熱のないのが即ち寒である。眞理不眞理の關係が丁度それと同じである。然るに美醜と善惡とはそれと違つて、美もあれば醜もある。善もあれば惡もある。故に美醜善惡は表裏とは云ひながら、全くの表裏ではない。是れは程度の相違階級の差等である。極美と極醜と、又至善と至惡とを比較すれば、全くの表裏のやうであるけれども、其中間にあるものは、唯程度が違ひ階級が異なるのみで、決して表裏ではない。是れは彼れより美しい、又は醜いと云つても、其彼れと云ふのを、又他のものと比較すれば、此彼れと云ふものが却つて美しいことがある。此やうな行爲は彼のやうな行爲よりも善いといへば、此やうな行爲は甚だ善いやうに聞えるけれども、又之を一種他の行爲と比較すれば、却てそ

れより善いとは云へぬと云ふやうな場合もある。右様な譯であるゆゑ、美醜善悪は全く比較的である。即ち程度の違ひ階級の異なるので、全くの表裏とも言ひ難いのである。是れだけが美であり醜であり、又是れ以上が善であり、是れ以下は悪であるといふやうに、嚴密に分界を立てることは出来ぬのである。

右様な譯ゆゑ、一方に眞を置き、他方に善美を置いて比較すれば、互に大いに異なつた性質を持つて居ることがわかるけれども、又他方面から比較を試みる時には、眞美の二つは同じ性質を持つて居ると云ふことがわかる。而して此異同が倫理學の研究上に、大なる影響を及ぼすものであると思ふ。世の學者は眞善美の三大理想を并稱して、或は之を三女神と稱する人もあるけれども、此三大理想と自然との關係に於て、三大理想の價値に高卑の相違があるやうに思はれる。其譯如何と云ふに、余の考ふる所では、眞美の二つはそれは自然界(無機界有機界)一般、即ち、全宇宙に存するものであるけれども、獨り善の一つは有機界中の人類界、否、其中の共同界、即ち

重もに國家的社會にのみ存するものであると云ふ相違があるからである。

博士は實に間違つた議論をなす、凡そ宇宙間にある眞理も不眞理も、吾々の眞理不眞理を判別する一種靈的至善の理性が有るに由つて、眞理不眞理といふ區別も出来るのである。昔しより幾多の學者が眞理と極めたことも、後ちには不眞理となつたことは問々あるではないか、火は熱くて水は冷いと云ふことも、或ひは種々の研究によつて發明せらるる所の諸科學も、吾々人類に至善なる靈的理性があつて、研究區別するから分たれるのである。又美と云ふものも同一で、吾々人類は花を看れば美であるとか、月を觀れば清らかであるとか、一種崇高なる靈感があるからである。然るに博

士は眞美の二つは無機界有機界一般に存するものであるといはるゝが、彼の無機界設令へば瓦礫とか金鐵とかの無機物が果して宇宙に在る美の觀念を有して居つて、花は美だとか、月が清らかであるとかの感覺があるものであらうか、實に此は分らないをいはるゝのである。曾て癲癇病者があつて、澤山火を起こした圍爐裏の側に坐し居たが、卒かに癲癇が起り其のまゝ火中に頭を入れて、其の顔の焼けるのも知らなかつたが、別室に居た家人等は人の肉を焼く香がするに驚ろき、馳け付け見れば主人公が顔や鼻も黒焦になつて、其の儘火中に倒れて居るのを見て、打ち驚ろき抱き起こして介抱し、病者の常に復した時に尋ねたるに、少しも熱さを覺えずと答へしと、是れ全く病人は知覺精神を失なつ

て居たから、熱さも分らなかつたのであるが、斯かるときには眞美の觀念は少しもありはしないではないか、又た彼の外科醫などが患者を解剖するときも、魔酔劑を施せば如何なる荒療治をしても感ずるとは無い、斯かる時には眞も美もあつたものではない、かくても博士は猶ほ宇宙の間には眞と美と存すと云はるゝか、前にも云ふ如く美といふ觀念も畢竟吾々の善否、至善なる理性のあるに由つて存在するのである、つまり宇宙間の森羅萬象は、總て吾々人間の心の影像に過ぎないのである。富士山は高いとか大海は深いか云ふのも、吾々が富士山を高く、大海を深しと感ずるからである、昔し王陽明ある日友人と共に深山に遊ぶ、一友人巖中に美しい花の清き香を放つて咲て居るのを指し、王陽明

に問ふて曰く、天下心外の物なしとすれば、この花の如き深山の中に在つて、自から開らき自から落つ、我心に於て何ぞ相關せんと、陽明之に答て曰く、汝未だ此花を看ざる時、此花汝が心と同じく寂に歸す、汝來つて此花を看る時、則ち此花顔色一時に起り來る、便ち此花汝が心の外にあらざることを知れと。是れ唯心哲學としては未だ純正なりとは云ふべからざるも、亦其間に一種の眞理があるのである。又博士はいつも倫理即ち道德は人と人と相互の間に止むを得ず生じたもので、即ち人類界中共同界國家的に生じて居ると云はるゝのは、畢竟今日行はれつゝある社會一般の倫理道德なるものは、萬善具備なる宇宙の絶對實在を根本とせぬ、偽善虚飾の倫理を目して論ずるからである、眞に倫理道德が

進歩して、所謂至善より根本を發することを自覺するやうになれば、俗悪虚偽なる今の倫理が、その根を絶つに至るのであらう、吾人は俗悪虚偽なる倫理を排除して、眞誠なる至善に到らしむるに務んければならぬ、博士は又善惡の理想が本能ならば、吾々人間は皆教を俟たずして善をなし惡を避けさうなものである、學ばすとも倫理に合する行爲をなしさうなものであるのに、決してさうでない、却つて惡をなし善をきらふものが多いのは何故であるか、實に譯の分らぬ事である」と云はるゝが、これはまた譯の分らぬことである、凡そ社會一般の人類中に、彼の人慾の私なるものに制せられて、人の害をなすものも有らうけれども、悪いことをすればこれは悪いといふことを自ら知らぬものは無い、而

して博士の所謂善悪は何を標準にして居られるのであらうか、随分普通法律上では悪事と斷ぜらるゝものも、其事は眞に悪事でないともあり、或は法律に觸れいでも倫理に背く悪をなす者は幾等もあるのであるから、善悪の區別は中むつかしいものである、博士は又善も悪も宇宙の實在物であると云はるゝが、此は主觀的常識上の見解である、博士は又直覺派の學者は動もすれば倫理を以て先天内容の聲、若しくは大我即眞我の聲などと稱へて、道德は實在より直接に顯現するものであると云ふやうな事を説くのである、そのくせ實在なるものは、善悪邪正の差別を超越して居る、平等無差別の物であると云ひながら、唯道德即善のみを實在の顯現として、不道德即ち不善も、亦同じく實在の顯現

であることを忘れて居るのである、實在と云ふものは實に善悪邪正を超越して平等無差別なるものに相違ないのであると云はるゝのが、直覺派の學者は、吾々人類の常識上に於ける善悪邪正を、單に無意義なる主觀的事象なりとし、最初より眼中に置かずして、直に純正至善の理性實在を認むるのである、博士の論旨は恰も宇宙萬有の平等實相を説き、善も實相なり、悪も實相なり、美も實相なれば、醜も亦實相にして、善悪美醜悉く宇宙の實在とする天台教の哲理に似て居る、されど天台の教理は善悪美醜、迷悟染淨を等しく實相とすれども、斯かる差別は吾人の主觀的常識上の見解であつて、廣大無邊なる大宇宙の上より見れば、平等無差別なる眞實の相と認ると同時に、悪を心靈上の能具と見、能具の悪

に満足せずして、己具の善に由りて満足せんとし、漸次に悪の實質を滅せんと立つれど、博士の論旨は利己的根本動向と云ひ、最初より善なるものを眼中に有せざれば、天台の哲理とは霄壤の差があるのである。又博士は善悪の理想が本能ならば、吾々人間は皆教を俟ずして善をなし悪を避けさうなものであるが、却つて悪をなし善を厭ふものが多いと云はるゝが、之は博士の皮相の見であるのだ、古人も云はれた如く、孺子の井に入らんとするを見れば、必ず怵惕惻隱の心が起る、鳥や獸の哀鳴齟齬を聞けば、必ず忍びざるの心を起し、或は草や木の摧折するを見ても、憫恤の心が起る、或は又無機物たる瓦礫などの毀壞を見ても、一種顧惜の心が起るのは、畢竟吾々人間には仁心即ち至善なる理性を有する

からである、然るに博士は三大理想中其根本たる善を斥けてしまはるゝのは、一種の僻説に過ぎないのである、然しながら博士も矢張自説は完全なものでないと自覺して居られる、博士自らも曰く、尤も眞美が一般自然界に存するものであるといつても、眞美の理想といふものは、唯吾々人間に存するものである、吾々人間が存在せなければ眞美の理想は存するものでない、既に高等動物中にも多少存するといつてよいけれども、吾々人間が主に知識に依つて眞理を認識し、又重に感情によつて美を感ずるのであるから、若し人間があらざれば、眞美の認識、美の感ずるはないのである、即ち博士は自己の主張を取消して居られる、善は即ち普遍的である、試に善を普遍的ならずとせば、社會は劣等なる利

己主義者の巢窟となり、高尚なる利他主義者の影だにも止めなくなるのである。吾等専門に研究しつゝある華嚴聖典の教理では、最初より小なる差別的善惡美醜を認知せずして、直に至善至美なる法界性(宇宙の實在)を觀するので、博士の直覺派學者の説を咎むるのは、恰も女性の裸體が風俗を害するとして、直に天人の裸體を攻撃すると一般で、實に笑止千萬な議論である。(此第七章は曾て公會の席で演説した筆記を抄録したものである)

### 吾國體と宗教終

## 名教學校創立趣意書

皇上嘗て儒臣に諭して曰く、教學の要は本末を明かにするに在り、本末明かなれば則ち民の心定る、民の志定つて而して天下安しと、

謹て 聖旨の在る所を按ずるに、我が 祖宗の天に繼て極を立て、斯民を教化し玉ふや、一も至仁に出てさるは莫し、是を以て民咸敦淳正直、父子の親に篤く、君臣の義に明か也。中世儒佛二教の我れに傳はりしより、忠孝仁義の説益々断かに、博愛慈悲の論愈々廣く、而して世に盛衰あり、時に隆替ありと雖も、未だ曾て教學の本末を謬り、忠孝仁義の大道を廢せざる也。

夫れ忠孝仁義を本として智能を啓發し、博愛道德を先にして術藝を習ふ、即ち教學の主要也、是に由て億兆の志一に茲に定まり、而して後其の智能の啓發する所、乃ち之を言語に發し、其の徳器の成就する所、乃ち之を實行に顯はし、進て以て公益を廣め世務を開き、天壤無窮の 皇運を扶翼す可きもの、皆斯道に由らざるは莫き也、蓋し忠孝は形而上の心性に屬し、術藝は形而下の智能に屬す、忠孝は本也、術藝は末也、若し其の本末を過り、其の前後を謬らば、則ち 祖宗の大訓に背き、國體の精華を傷け、風教を紊亂し、其の害勝て言ふべからず、豈

寒心せざる可けんや。

吾輩平素私に此の憂を抱き、名教を既衰に維持せむと欲する久し、今や時勢黙止す可からざるものあり、茲に自ら揣らす、將に名教學校を創立し、以て教學の缺點を補はむとす、蓋し當今公私大中學校の設け多し、然れども、多くは智能術藝の講習を先とし、仁義道德の教育を本とするもの少し、是れ本を棄て末に趨り、大に教學の主旨に背くにあらざるか、吾輩の此の學校を興さむとするものは、世の學校と其の撰を異にす、即ち教育勅語の聖旨を奉體し、忠孝を本とし、仁義を先にするの道を講し、専ら明倫修徳の教育に盡さむとす、而して其の術藝を講習し、人材を養ふの點に至ては、世の學校と規を同うし、以て大に風教維持の任に當らむとす、是れ本校の設けざる可からざる所以也、冀くは大方の諸君子、謚の微意を諒し、此の創立に力を假し。以て此の校を創立するを得せしめたまはむことを。

創立委員長

公爵 二條 基 弘

創立副委員長

伯爵 柳 原 義 光

創立委員

子爵	渡邊 國武
伯爵	龜谷 聖馨
伯爵	宗重 望
侯爵	黒田 長成
侯爵	久我 通久
伯爵	土方 久元
伯爵	東久世 通禧

今上即位三十七年一月一日

創立賛助員

宮内大臣 伯爵田中 光顯	樞密顧問官 男爵細川 潤次郎	大内 青巒
故從一位 公爵近衛 篤磨	文學博士 井上 哲次郎	森村市左衛門
樞密顧問官 子爵金子 堅太郎	式部 長伯爵戸田 氏共	文學博士 南條 文雄
内藏 頭子爵渡邊 千秋	早川 千吉郎	東京府知事 男爵千家 尊福
樞密顧問官 兼御歌所長 男爵高崎 正風	貴族院書記官長 太田 峯三郎	東京市長 尾崎 行雄 (外百三十五名)



創立組織概要

四

- 一 教育勅語の 聖旨を奉體し國體國力を扶翼せんか爲め先づ尋常中學の程度に據り中學を養成し漸次基礎の定るを待ち大學部を増設し國家の須要に應ずる高等の學術を教授せむことを豫期す
- 一 本校設立の爲め大方諸賢より資金の寄附を受くるものとす
- 一 創立費概算金貳拾萬圓を要す
- 一 諸賢の寄附金全額納附の時は諸賢に對し其の懿志を永遠に傳へむか爲め禮狀を贈呈す
- 一 寄附金は凡て三井銀行及十五銀行へ預け募集期限に達したる時は法人設立の手續を了し完全なる保護を得んことを期す
- 一 事務所は東京市麻布區麻布三軒家町五十四番地に置く
- 一 募集金額五萬圓に達するを待ち中學校の開校に着手す
- 一 校舍敷地は東京府下豊多摩郡代々幡村大字代々木字富ヶ谷(鍋島侯爵家所有地松濤園)に定む

公府二條弘基序  
龜谷 聖 馨 著

教育聖典 義 全一卷 刻近 東京名教社發行

龜谷 聖 馨 著

吾國體と宗教 全一卷 刻既 東京名教社發行

伯爵東久世通禧  
龜谷 聖 馨 共編

修身綱要 全七卷 刻近 東京名教社發行

龜谷 聖 馨 講演

華嚴金獅子章講義 全一卷 刻既 東京光融館發行

井上(巽軒)南條、前田、村上四博士序  
龜谷 天 尊 著

聖者馬鳴 全一卷 刻近 東京大成會發行

龜谷 天 尊 共著

北白川宮 全一卷 刻既 東京吉川弘文館發行

渡邊國武子、佐保山大僧正、南條、前田兩博士、森部前淨土宗大學教授序

華嚴聖典 全一卷刻近 東京大成會發行

田中宮内大臣題詞、渡邊無邊先生書翰  
故原抱一菴氏序  
龜谷天尊著

瑤琴 全一卷刻既 東京東亞堂發行

渡邊國武子、巖谷小波氏序  
前田博士評、龜谷天尊著

大自觀 全一卷刻既 東京嵩山房發行

伯爵柳原華山共著  
龜谷天尊編

說天人像 全一卷刻近 東京嵩山房發行

東久世竹亭伯、故副島蒼海伯序  
龜谷天尊編

海舟遺稿 全一卷刻既 東京鴻盟社發行

21/4/41

明治四十一年二月十一日印刷

吾國體と宗教

定價金三十五錢

明治四十一年二月十七日發行

著者兼發行者 龜谷聖馨

發行所名 敎社

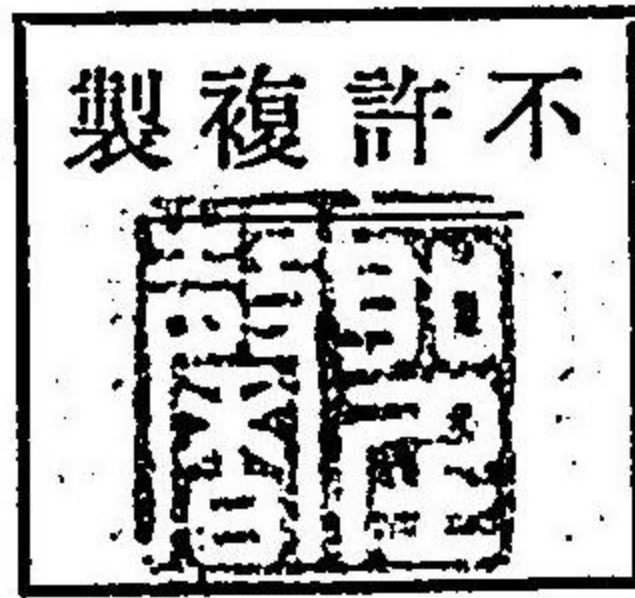
東京市麻布區三軒家町五十四番地

印刷者 山田英二

東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所

東京市小石川區久堅町百〇八番地



# 大賣捌所

東京市麻布飯倉五丁目四十七番地

森江擁萬閣

東京市本郷區本郷一丁目九番地

東亞堂書店

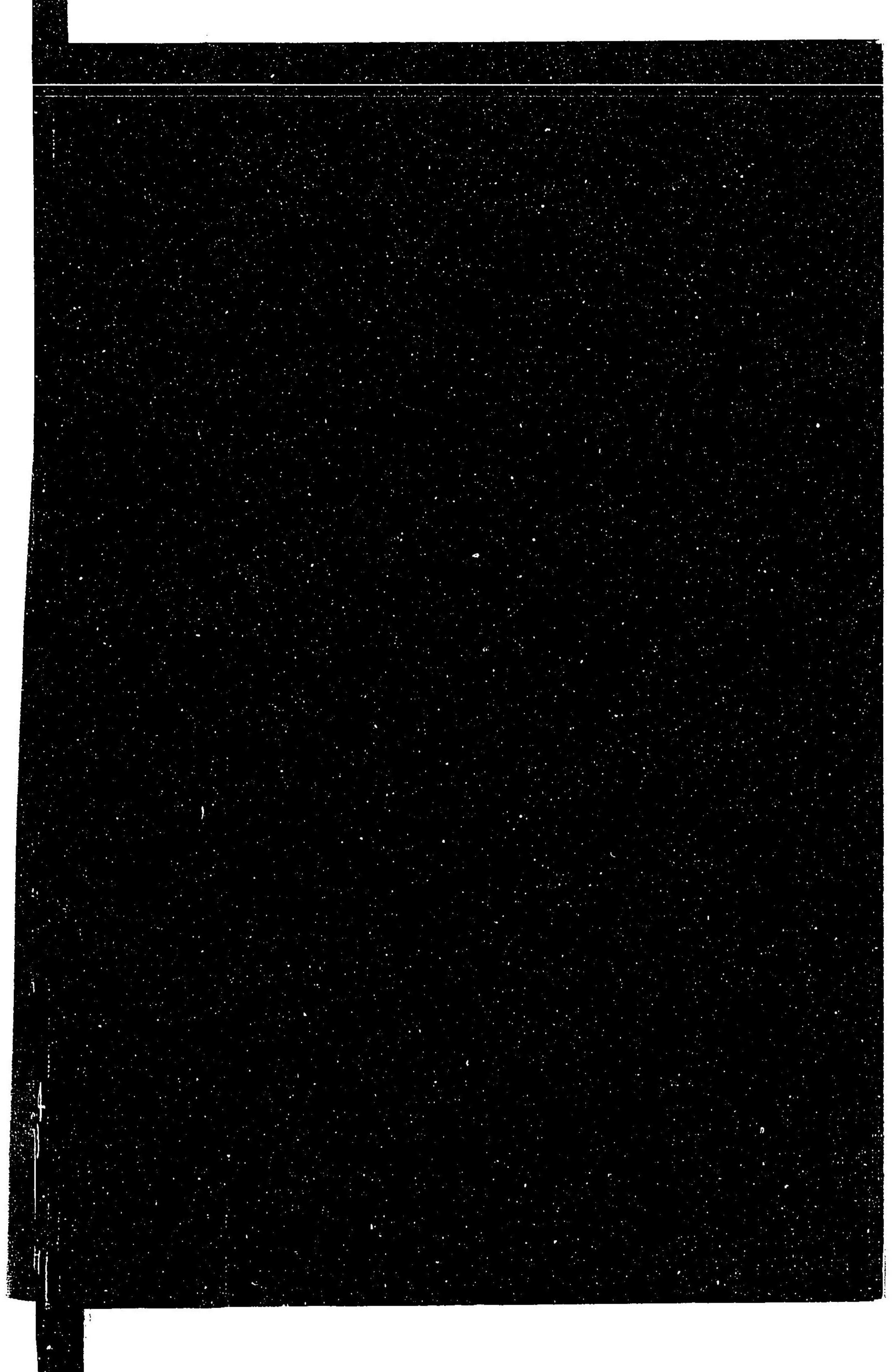
東京市下谷區中根岸七十五番地

小林嵩山房

東京市神田區駿河臺西紅梅町十番地

光融館

324  
69



324  
69

013789-000-0

324-69

吾国体と宗教 加藤博士の所論を駁す

亀谷 聖馨 / 著

M41

ABA-0279



- - - -

36.11.28